京都帝國大學新聞

購讀料 一部五錢(郵税五厘) 一年一圓(郵税とも)
廣告料 一行につき金五十錢 (記事中は此二倍) 揭載ページを指定するときは二割增とす
發行編輯兼印刷人 入山雄一
發行所 京都帝國大學 同學會新聞部
電話(上)九八〇番 振替京都八二〇三

講座陣の整備へ！

混沌たる世界情勢はその赴くところを知らず、一寸の油斷、世界の進歩に立ち遅れる今日、研究機關をより充實してわが國の世界史的發展指導の基礎たらしめることは最も重要かつ緊急事であるが、これが要請にこたへて本學に諸講座を增設し、研究陣容を整へることゝなつた、すなはち工學部に新學科「纖維化學科」を設立し、こゝに三講座をおき、すでに學生も入學して授業を開始し、又機械工學科中に「航空機力學」講座を設置し七月頃より開講の豫定、文學部に「イタリヤ文學語學」講座を設置し、授業を開始してゐる

文房具・紙・印刷 垣見汲古堂 京都市蛸薬師烏丸西 電話本局三〇五一番

纖維化學科を新設
時代の要望に應じて

昭和十四年以來、毎年一つづゝ工學部に新學科が建設された、すなはち十四年には燃料化學、十五年には化學機械が工業化學から分離して新生の出發をなしたが、今年度は喜多、櫻田兩教授の努力により新たに纖維化學教室が設立されこゝに本學化學系統は完全に研究陣容を整へたわけである

纖維工業は明治以來製糸、紡績の方面において目覺ましき發展をなし、原料を他國に仰ぎながらも生産品を輸出してその活躍ぶりは世界の最高水準をいつてゐたものであるが、一たび現時の如き情勢に立ち至り、原料確保困難なるに及んでは市場に見る劣惡品を産出する有様で、かくの如きは一面に我が纖維工業の基礎方面ことに化學的研究がいさゝかでも顧みられなかつた點に原因があると氣附いた喜多、櫻田兩教授は本學に工業化學とは別に纖維化學科なる別學科を設立し一意基礎方面の研究に專心せんことを念願し、昭和十三年六月、纖維化學方面の資本家、技術家を招き、第一回設立準備のための會議を開き、その後、大いに努力して、今年度に漸やく成果をみるにいたり、本年四月學生も十七名入學し目下教室の內容充實の歩を着々と進めてゐる

講座數は今年度は三で來年度に又一つ增設する豫定、第一講座は從來工業化學科に屬してゐた纖維一般に關するもので櫻田教授の擔當、第二講座はセルローズ系纖維化學工業で堀尾教授擔當、第三講座は合成纖維を中心とした合成高分子化學でちかく教授も決定する、ゆくゆくは纖維物理か紡績機械の方面の講座も設置する豫定で、授業內容は從來の工業化學科におけるとほとんど同樣な工業化學の知識の上にさらに木棉、羊毛、絹等の天然纖維および纖維學、天然高分子物の化學、合成纖維を中心として合成ゴム、合成樹脂等に關連ある合成高分子物の化學、纖維一般論、應用コロイド學等の基礎的事項とその應用工業たる人造纖維、パルプおよび紙、可塑物、その他の纖維化學科獨特のもので、多數の選擇科目を設け、學生の希望に依り種々の講義を自由に選擇し得るようにしてある

教室は西部構內に目下建築中であるが、去月三十日、纖維化學設立委員會の寄附で工業化學教室の横に七十坪二階建の新館が出來學生はそこで實驗を行つて誕生間もなしとはいへ、工業化學科卒業生の二割以上は直接纖維化學ならびに化學纖維工業に從事しつゝあり、したがつて學界との連絡も深く、後援者も多いわけでこの教室の生長發展は大いに期待されてゐる

なほ機械工學科に航空機方面の講座が新設される豫定で、これも六月ころまでには確定するであらう

天長節拜賀式

さる四月二十九日、天長の佳節に際し本學では午前九時、教職員・學生・生徒一同本部階上大ホールにあつまり、嚴肅に拜賀式を擧行した

伊太利文學講座
兩國文化の理解交流へ

各方面より大いに期待されてゐる盟邦イタリヤの文學講座はいよいよ今春からはじめられたが、內容はイタリヤ語學とイタリヤ文學で一週十一時間の豫定、黑田正利講師が六時間、フオスコ・マライーニ講師が五時間である、新らしきものを生まんとする熱情にあふれてゐる黑田氏を教室に訪うて抱負をきけば

日本で初めてイタリヤ文學講座が設けられたのであり、またこの講座が原田積善會、外務省文化事業部、本學總長、新村名譽教授、文學部各教授の御盡力によつてできたことを思へば、私としても責任の重大なるを痛感すると共に皆さんの御期待にそひたいと深く考へてゐる、日伊間における學術文化の理解交流を考へるがゆゑに、この講座としてはイタリヤ文學、語學の起源およびその發展、將來を研究するのであるが、かゝる仕事は綜合大學で初めて出來得るのであるとゝもに、私としてもこの基礎の仕事に一生涯をかけて、微力ながら盡したいと思つてゐる、その方法としては國の內外を問はず斯學に關する圖書を蒐集し、イタリヤの風物或は美術に關するものなども集めたいこれは伊太利政府の寄附その他によつても是非やりたいものがある、學生についても初歩の人が多いと思ふが、餘程の熱意をもつてやる覺悟が無いと難しい我々も先輩の意見をきいて導いて行くつもりである、始めイタリヤ文學思想等を研究して居られる人をあちらから呼びたいと思ひ、またイタリヤの學會の好意により、推薦してもらつた、であるが、實用や學生の學力等を考へて實現出來なかつた、學生にはまづイタリヤ語を教へなければならぬのであるが、幸に伊太利大使館の協力によりマライーニ氏を傭むことになつた、氏はフイレンツエの人でそこの大學で人類學の學位をとり、日本では北大でアイヌを研究して居られた篤學の士で、語學はもちろん、文學の鑑賞力もゆたかでダンテを始め古典を大變に愛好されてゐる、また非常な日本びいきで、北海道で出來たお孃さんに雪子の名を附けてゐるくらゐで、明朗淸新大いに張り切つてをられる、最後に日伊文化協定によりローマ大學に日本語文學講座がちかく開設されることになつてゐるから、本學とローマ大學との文化交流が囑望されるのである

と元氣に語る言葉のうちに强い明日への研究が約束されて心づよく感じられたのである

醫・工兩學部
講座を增加

四月十五日附勅令第四百三十五號をもつて本學各部講座に關する件中改正の件を裁可、公布せられたがこれにより變更をみたのは左の通り

▼醫學部に「生藥學一講座」を加ふ

▼工學部中「工業化學を五講座」「化學機械學を三講座」「燃料化學を四講座」に夫々改め、さらに「纖維化學三講座」を加ふ

新學士の職場第一報

新聞生活第一歩

法學士 柴田敏夫

T兄—元氣か。同學會として再出發した學友會の新しい發足ぶりはどうだ？入學以來まる三年、學友會活動に沒入し、改組に最後まで參畫してゐた僕にとつて、學友會のその後の動きは常に氣にかかつてゐる。新しく誕生した同學會が學友會の位した段階より伺一層飛躍的な發展を遂げるためには兄等新委員の努力に俟つところがきわめて大きい。自重自戒大いにがんばつてほしい。

入社して最初に與へられた仕事は校閲部、こゝはゲラ刷の記事に朱筆を入れる、誤字、假名遣ひの誤りなど、一部出勤で朝十時から夕方六時までと午後三時から夜十時まで、アパートのおやぢに早出と遅出なんてカフェーの女給みたいだと笑はれた、時間はかなりフリーで、朝十時といつても十時半か十一時までに出て來ればいゝのだ習つけの朝寢坊の僕などには誠にありがたい、然し校正といふ仕事は隨分疲れるものだといふ事は雜誌の編輯などで經驗ずみだが、こゝの仕事は校友會雜誌の校正どころのなまやさしさとは比較にならない、朝刊だけで一版から八版まで出る新聞は各版それぞれ降版時間といふものが嚴格に定められてゐる、御承知のやうに新聞社といふ所は秒單位で仕事をするところだ、次から次へと送られてくるゲラ刷にどん〳〵朱を入れて次へ廻す、一番手のかゝるのは宮廷關係の記事之には隨分愼重を要する、嚴格に見た上で宮廷記事擔當の校閲係に提出する、仕事を終へて數寄屋橋を渡り銀座へ出ると明るい電飾に眼がチカ〳〵して頭のへんがむづかゆいおよそジャーナリスティックな感覺から遠い仕事だが、校正の正か否かは新聞の品位と信用に關する問題だけに忽諸すべからざる重要性を持つ、活字が一字横を向いてゐるだけで何だかその記事ぜんたいの確實性があやしくなる氣がするのは兄もよく經驗される所と思ふ、十一日から地方部で訓練をうけたこゝは全國各府縣の地方版關係のもので東京で取材できるものを記事にする所で內務省はじめ各省にも記者が行つてゐる、校閲部の仕事とちがつてこゝはジャーナリストとして第一線に活躍するのだから仕事にうんと身が入る、朝十時半ごろ出社、部長に仕事をもらふたとへば先般の高校はじまつて以來の高校長大異動の時など、一高の教授から大高の校長になる人があるといつた場合、寫眞班と一緒に一高に行きその教授に會つて新校長の抱負を聞くこれは大阪版の記事、又有名な人が死んだ場合などその人と同郷出身知名の士に想ひ出話を語らせる。これは勿論その人達の出身縣版にのる締切時間は各府縣によりそれ〳〵定まつてゐる記事の要領をメモして社に歸ると原稿デスクで原稿を書く、原稿は四六版位の白紙に三行宛、一行十字位エンピツで大きな字をならべる。從つて一頁に新聞記事として二行位のものが書けるわけだが大抵書きすぎて部長にジャン〳〵朱を入れられてすつかり手ぎわよく短くされる。たまに無修正でパスして翌日の朝刊に二段ぬきのみだしでもつけてもらふとすつかりうれしくなつて自信をつけるがまたその翌日にはペシヤンコになる。

地方部にゐる間で忙しかつたのは第一回興亞馬事大會と地方長官會議、それから靖國神社臨時大祭だつた、いづれも二縣位宛擔當して大体の眼目も教はつて行く。この中でも最も骨の折れたのは臨時大祭だ。擔當縣が東京へ着くといふ日は前日から社へ泊つて早朝、驛へ出迎へに行き、記事になりさうなのを探す。腰のまがつた田舍のお爺さんが出征當時まだ生れてゐなかつた孫の手を引いて息子の英靈に對面にくるといつたやうなのを。

また擔當縣の遺族の名を東京の聯合事務所へ行つて一萬四千餘の人の中からめぼしいのを書きぬき戰死場所年月日、階級、上京遺族の番號及び宿舍を調べ、番號によつて日程を調べたら宿舍廻りをする。靖國神社の受附へ寫眞班と一緒に行つて待機する。等々。

二十六日から社會部へ來た、仕事もいよ〳〵本格的で、いまゝでの樣に手をとつて教へてくれるやうなやり方はしない。それだけに「闘志と情熱」とを盛りこむ事が出來るわけだ。二、三日中に警視廳や警察廻りが始まるさうだ、社會部に十日ばかりゐて、寫眞部へ行き新聞寫眞の撮り方を習ふと、そろ〳〵地方へ出されるのではないかと思ふ。とにかく新聞社といふところは明日どんな事をするかわからない。その日の夕方になつて「明日から○○部で訓練をうける」と言はれるやうな調子。二十五日には生れて始めてサラリーをもらつた、丸公七十五圓に物價手當十圓、そこから税金一圓五十錢と積立貯金五十錢が差引かれてゐる。最初のサラリーなのでいのしし一枚を最も心配をかけたおふくろに記念のために贈つた。

さて京都をたつ前にインテリゲンチヤとして最もインテリゲンチヤらしき職業に於て仕事をする事が出來る僕の幸福を兄は祝福してくれた事があつた。いまの「重大戰局下」にあつて新聞もまた前線の途を歩んでゐる曾ての自由主義華やかなりしころの樣なけんらんさを之からの記者生活には望むべくもない。高度國防國家体制完成のためには言論統制もます〳〵强化されるだらう用紙制限の問題もある。しかし僕は思ふジャーナリストとしてその使命達成のためにまだ〳〵開拓すべき分野がのこつてゐると。がつちり勉强して最もインテリゲンチヤらしき仕事の實を擧げたいと意氣込んでゐる。

大陸で合同訓練

經濟學士 佐伯進

I兄、お便りを拜見、京都の生活と始めて郷愁あるものたらしめた兄獨自の思索に根柢を置いた近況に接し色々教へらるる點がありました、思へば遠くはてまで來たものです、正しく云へば滿洲國濱江省珠河縣一面坡開拓義勇軍訓練所に卒業式にも參加できずにやつてきてゐます——滿洲國特殊會社新採用職員合同訓練が成立つた許りのわれ〳〵に從來は採用後、既定された職場へ配置され、滿洲國の特殊事情に對する認識並に建國精神に對する信念を体得する機會に乏しく、たとひ各機關において訓練を實施しても、內容が專門的分野におけるテクニカルな講習會の傾向があるとて綜合的な基本訓練こそが最も要請せられるものとしての一元的綜合的訓練が課せられ心的行的鍛成によりて建國の本義を体得せしめようとして協和會首都協和會議會に昨年提案され、全國聯合協議會に上程されて今回の如き具現を見たわけです、すなはち滿洲國々家人たる各職域の綜合を目標として約一ケ月にわたり大學專門學校卒業以上の特殊會社職員に對し實施せられ、さらに基本訓練を經つた後實務習得のための訓練が個別的に行はれることになつてゐるわけで、小生は五月初旬より某新礦業所へ社業体得のためにやまくらしを要請されてゐます

訓練の內容は流行の行訓練と滿洲建國の本義を究明せんとする學識によつて構成されてゐます

滿洲の、殊に北滿の天然、風物の特色を充分現はせる現地はモノトニアスな枯色が空間にみちあふれ眼界はたゞ無限大の可視距離をつらならせて距離の規準も一寸あてのつかぬ所謂曠漠千里聖を趁ふ北滿の曠野です、この枯色にふさはしくも支那家屋式の饅頭が棟を並べてゐるのです

兄の指摘せる、遊びにきてゐるか出稼ぎに來てゐるか分らぬと云ふ心理の片鱗が小生の書簡からうかがはれたと云ふのですが未だ形式的には社業へのつながりを意識しなかつたせゐか止むをえなかつたですが、この通り西部開拓のにほひをふんだんに漂はせてゐる現地で徐に働きに意識してゐることも意識し出しました

社會への趣味と政治の時代なアカデミズム、獨逸の中に年月を過し、しかも瀟洒な道を歩み求めた小生にとつて社會的實踐行動へ前進せんとする時、マンネリズムな學生生活の困憊と生き方の對立にあがいてゐる今です、ことに講義は滿洲國の權威が擔當し建國精神の本義を徹底せんとする趣旨で建國當初の熱情をよみがへすごとくに体驗を默殺する裡に胸に迫るものがあります

毎夜、黄色いランプの明りをムサボるが如くとりかこんで催される研鑽會では十冊を通してしん〳〵せまる雰氣を感じつゝシルエット群が一テーマに眞摯な意見を鬪はすのですが、昨夜も協和會の人がやつてきて植民地論に關して滿洲建國の實情を論じましたが、彼の若き同宇の間にたぎつてゐる情熱はともかくとして、學理とかデンケンを無視して結果を强に引き出す形而上學的な考へ方と小生らの社會科學の理論と正面衝突しました、アカデミズムに慣れてゐる彼等はあくせくとしてそれを求めようとしてゐるだけに、そんな態度を採つたのでせう、小生の考へ方に生き〳〵と動いてゐるのにN教授のそれです、ことに先生は國の前夜昭和五年、理性とライデンシャフトをかみ合はせてがつちり行けとおつしやつたのを思ひ出しました

しかし我々は懷疑は眞實を知つてやまぬ心は未だいたるところに不安定感を與へてゐます

およそ文化生活からかけ離れたこの環境にかつては河原町を、そして銀座を、その有閑性と歡樂性に慣れきつたまゝに歩き廻つた連中は感心なことには默々として今の生活を眞劍に設計實踐してゐます、なにしろ酷寒、濕地の不便な條件で病患者も出てゐますが、始めての企畫としかも數年實施をみるだけに具体的實施要綱にも批判の餘地が多分にあります

だら〳〵と書き並べましたが——講義も大分進み、昨日も開拓と農村に關する問題と題して五十子開拓廳長の話がありました、滿洲開拓においては民心の把握、計劃的增殖、集荷、配給、開拓地の建設が焦眉の問題なりと相倶れた口から綿密に說き、村落自治を建設增殖の第一線たらしめる種々の手段を說明しましたが、その現實の一元化を說いてゐました、スムースな論調もかんちんのところで飛躍して分りきらぬことになるのです、そのあたりにすべて求めらるべく要求されてゐるものが介在してゐるのでせうけど

勤勞奉仕の時は地下數尺凍結してゐる大地にしばし見とれたり、ふみあらした土くれのなかに芽一つを見出した時にはエランヴイタールの聖なる讃歌が心からほとばしり出ました、春とは云へまだうら寒いです、謳せられるそして体する現象形態の多く、いろんなことが考へられます、腰を顯めた記錄の中に一寸書いてみましたね、彼等的インテリと文化的インテリのセクショナリズムの暗默のたゝかひは、この部分社會にも顯刺的に認知されますが理論の正しき先行を義務を履行して始めて獲得として果して行きます、明日は二里さきにある拔城村の開拓を現實に行くことになつてゐます、職場第一線はかくの如き訓練のありさまになつて戀しからず、他日無邊の大地と濕い陽光の匂ひ溢れ、そこに働く人々の汗の喜びを盛つた生々しい報告を約束してお詫びとふ

(四月十五日)

哲學大會のため西下の橋田文相平安神宮に參拜す

世界觀と國家觀
西谷助教授講演要旨

一、國家を感性的(又は自然的)—理性的存在者と見做す見方が、從來の見方のうち最も具体的であると考へる。その際理性的としては法的意制や人倫が意味されてゐる然るに現在の國家は、その生存に「精神的總動員」を必要とすることのうちに、新しい象面を展開しつゝある。即ち從來は個人の內面からの自由な自發に委ねられてゐた普遍人間性の立場での道德・哲學・宗教、要するに世界觀(或は世界の內にかる人間の實存的な自覺)に關はる諸領域にまで、國家の規則が延びて來てゐるのである。そのことは現在の諸强國がそれ自体既に思想的性格をもつてゐることに現れてゐる。それは非常時の一時的現象ではなくして、國家がその相互關聯のうちに高度の政治性にまで成熟して來た發展の歷史必然的な結果である。そこに個人と世界と國家の間の關係が、自由と統制との關係と結びついて、現在の國家に(自由主義國家にも全体主義國家にも)緊急な問題として呈示されてゐる。

二、現在の國家は高度の政治性の要求から、國民生活の外的・內的な一切の部面に及ぶ高次元の統制に進むと同時に國民の各自が衷心からの自發性を以てその統制に參ずることを求める。この自發性なしには、國家の政治的行動力のための統制が反つて之を阻害するものとなるからである。それ故、從來求められてゐた强制と自由との消極的中和と異り、强制も自由も夫々積極的に徹底されながら統制の原理のうちに止揚される。從つて統制は必然的に「精神的動員」に至り、世界觀に關る諸領域に波及する。然るに、世界性の性格をもつ諸事象にまで政治性を與へることは、國家の歷史的成熟の最高の段階を意味する反面に(その徹底的な統制が徹底的自由自發を要請する限り)國家がその根柢に自らの特殊性を超えた世界性・普遍性の地平を開いて來ることである國家の統制がその政治的に行動する面、國家存在のいはゞ最表面、へ總力を集中する仕方で起るのに對して、國家の世界性は國家存在の最底面へ總力を集中する仕方で起る(その最表面と最底面とが動的に結ばれる時、國民の各人が國家の內部にあつて世界觀的自覺に立脚しつゝ國家の行動に參じ得る「道」が與へられる)

三、國家の世界性とは、國家が其の構造そのもののうちに自己否定性或は自己超越性の面を含むことを意味する。自己否定性とは國家が國家でなくなることではなくして、國家にいはゞ絕對的精神の表現たる意義を與へるもの、それを眞實の國家たらしめる中心である(恰も個人に於て自我がその自己否定性或は無我のうちに眞の自我として出現する如くである)それは國家に內在的にして超越的、超越的にして內在的であり、國家の「理念」として國家に當爲の方向を與へると同時にまた事實であるかゝる自己否定性の面を國家の自然性と理性とに對し新しい第三の面として掲げ得る。

現在の諸國家がかゝる面を自らのうちに打開すべき必然的方向にありながら、然もそれを樹緊してゐるに止まるに反し、わが國の國体は始めからかゝる構造をもつ。徹底的規制と徹底的自由自發との止揚、國家としての高次の政治性と世界を包む開放性との統一、の可能はわが國の國家構造にあつてのみ與へられてゐる。

四、國民は國家の超越的中心に歸一することに於て、國家をして高次の政治性を發揮せしめ得ると同時に、また普遍人間性の立場での道德・哲學・宗教に於ける世界觀的自覺を深めゆく自由自發の開放を與へられてゐる。わが國の歷史に於て國の精神を具現する如き幾多の先人のうちに、佛教や儒學によつて得られた覺悟と國家への獻身との連繫が見られるといふ他國の歷史に見出し難き事實も、そこに根本をもつ。西洋的學問の新たに流入した現在に於て、東洋と西洋とを包む新文化を生産し得べき可能の源もそこにある。

絢爛、花ときそふ
研究業績の發表
諸學振興委員會哲學部會

日本諸學振興委員會哲學部會は既報の如く去月十八、十九の兩日本學で盛大に行はれた、まづ十八日午前八時半から橋田文相臨席のもとに宿雨に櫻花の一ひら二ひら散る風情を窓外に眺める本部會場で絢爛の幕を切つて落した、かゞやく金屏風の前にならべられた綠いろ濃き老松二鉢、左右の壁に懸けられた二百五十號の油繪、周圍の電燈は柔き光を投げて落ち着いた室內、この日この學の殿堂に會するもの

委員長藤野教學局長官を始め、本學より野上、高田、田邊、天野、小島、山內、西田、植田、羽溪、木村、九鬼、本田の諸教授、久松、西谷、泉井、高山、松村、島の各助教授、岡、山口、服部、平岡の各講師、東大より宇野名譽教授、戶田教授外五教授、東北帝大より高橋教授外六教授、その他九大、北海道帝大、臺北帝大、東京文理大、廣島文理大、京府醫大、大阪商大を始め全國高師、高校及び私立大學の各教授や國立北京大學から遙々馳せ參じた兒玉教授など學界の權威を網羅して約百八十名列席

定刻まづ橋田文相起つて一場の講演を試みて教學の刷新を說き、つゞいて東京文理大教授狄原博士から「國家目的觀の倫理學的考察」と題する研究の發表あり、次いで京城帝大教授小島軍造氏の「持場の倫理と國家の問題」と題する熱烈な研究の發表あり、次いで京府醫大豫科教授下程勇吉氏は「二宮尊德の世界觀と哲學」と題し彼の世界觀は政治、經濟、倫理、哲學、教育と凡ゆる分野にわたつて所謂〃一圓相〃の原理に立脚し、凡ゆる對立は一圓に還元して已まぬ一元太極の兩極面に他ならぬ、對立の一極は必然に運行して他極に移行する彼の所謂〃不止不轉〃である」と說き始め「佛教的悟道によつて執着を脫する時、現實の身体我を積極的に生かす人倫が同時に可能とならねばならぬ我身を〃元のあるじ〃たる天に貸し渡し人道が開かれる、かくて日月とゝもに輪廻すれば晝夜なしといふが如く、大道とゝもに二肢性をもつ君子の道にまで人道の意味が深められる」と論じ聽衆に多大の感銘を與へた、次ぎに關西學院大學教授小松堅太郎氏の「民族と國家」の發表あつて、午前の部を終了、午後よりは朝來の細雨も霽れ雲間よりコバルトの青空も見えて澄んだ心持の中に、東京高師教授松本博士の「國家の藝術的發展について」三高講師土井虎賀壽氏の「現實の形而性と形而上學」の研究發表あつて午後三時過ぎ第一日の幕を閉ぢた

第二日の十九日は陽光麗らかに照り渡りなごやかな氣分の中にまづ神宮皇學館教授鈴木友吉氏の「建武中興の理想とその道統」と題する發表あり、東大教授和辻博士の質問あり、次いで廣島文理大教授加藤常賢博士の「春秋學における王」と題する發表あつてから慶大豫科教授留木巖氏は「プラトンの國家觀を繞つて」と題して熱い元氣に滿ちた調子での發表あり、次いで東大教授出隆博士の「コスモポリテースの倫理」と題する發表あつて午前の部を終了した

午後の部は一時から東北大助教授石津照璽氏の「新世界觀の要求」次いで本學助教授西谷啓治氏の「世界觀と國家觀」と題する別項の如き研究發表あり、本學教授高山博士の日本の問題は拔きにしてと冒頭して問題を三項目に分け、國家が最後の發展段階であるかどうかと經驗主義的立場に立つて精緻な理論と謙虛な態度での質問あり、次いで臺北大教授世良壽男博士の「閉ぢた世界と開いた世界」と題する發表あつて意義深き學の集ひの幕を閉ぢた

中央實驗所を擴大して
工學研究所に
開設準備委員會開かる

五月二日午後二時から本學樓上で工學研究所開設準備委員會が開かれ、從來の工學部中央實驗所を擴大充實の目的をもつて、工學部附屬のものより本學の工學研究所にあらためその實行委員を左の諸氏に決定した

喜多工學部長、中澤中央實驗所長、鳥養電氣工學、西原機械工學、西村採鑛冶金、坂建築の諸教授および書記官、會計課長 以上八名

太陽觀測所完成す
所長は上田穣教授

昨年九月以來工費十萬圓をもつて建築中の本學理學部生駒山太陽觀測所はいよ〳〵五月中旬から觀測を開始する運びとなり、廿八日から花山天文台の望遠鏡はじめ器具類の引越しがはじまつた、同觀測所は大軌の寄附によるもので本館二階建百餘坪クリーム色の瀟洒な外觀で十五メートルの觀測塔、口徑二四インチの反射望遠鏡、太陽ラデイエイション、氣象觀測セリウムグラフ等を裝置し、陣容は所長が理學部教授上田穣博士、所員は渡邊講師、藤波助手、宮田助手で開所式は六月上旬擧行する筈

分類目錄の完成へ
和漢書第三冊まで出版

本學圖書館では著者書目の形式で本學所藏洋書の目錄を大正八年に完成してゐたが、昭和九年から和漢書の分類目錄の大事業に着手し十三年には第一冊總記すなはち全集叢書を、十四年には第二冊理學の部を、十六年には第三冊工學の部をこの程ようやく完成した、これは多額の費用と多大の努力によつてなされたもので、今後醫學、農學、法經、文學の部とぞく〳〵作られるのであらうが、全部完成のあかつきその利用價値はさらに大きいものとならう

「日本文化と佛教」
月曜講義題目きまる

學生課主催の本年度月曜講義はその主題を「日本文化と佛教」におき、一ケ年を通じて十數回にわたり、各方面の權威から講演が續けられることになり、そのうち第一學期分は、このほど左の通り內定せられた

▼日本文化と佛教の精神 文學部助教授 高山岩男氏 (五月十二日十九日)

▼聖德太子と日本佛教 法隆寺貫主 國學士院會員 佐伯定胤氏 (五月二十六日)

▼密教の日本文化に與へたる影響 文學部助教授 中村直勝氏 (六月二日)

なほ場所は法經第一教室、時間は午後七時の豫定であるが、詳細は學內揭示を以て追つて發表せられる

「東亞人文學報」
季刊として創刊號を發行

一昨年八月小島祐馬教授を所長として本學內に創設された人文科學研究所では、その後陣容をとゝのへ新東亞建設に資すべき人文科學の綜合研究につとめて來たが最近にいたり所員および關係者の研究調査の一部をまとめ「東亞人文學報」第一卷第一號を發行した大判三百餘ページの大冊でその內容左のごとく、今後一季一冊を非賣品として發行の豫定であると

▼北支那における農業者の性格=柏祐賢▼滿洲における契の研究=石田文次郎、淸水金二郎▼おほやけ(公)の國家觀=牧健二▼東亞聚落地理序說=米倉二郎▼滿洲國農業生產政策の吟味=大上末廣▼日本における家舟的聚落の調査=吉田敬市▼滿洲國經濟統制法について=中西寅一▼國民組織としての滿洲帝國協和會=伊藤滿▼「世範」にあらはれた同居異財生活の一側面=西田太一郎▼淸朝末における外債=柏井象雄▼書評=安部健夫、菊田太郎、淸水金二郎

不眠症 アラボン錠 (ブロムヂエチルアセチル尿素)
神經性不眠症 興奮性不眠症 船・車暈
◇外國製品を凌駕する、國產優秀催眠劑
一〇錠・三〇錠 第一製藥株式會社 (東京・大阪)

教授助教授
定員を增加

四月十五日附勅令第四百三十四號を以て本學官制中改正の件を裁可公布せられたが、これにより教職員の定員は左のごとく增減する

▼教授=專任二百〇四人(從前に比して五人增)
▼助教授=專任百六十一人(五人增)
▼助手=專任二百七十五人(十人增)
▼司書=專任九人(一人減)

學內辭令

任助教授(五等七級) 藤浪 修一
醫學部勤務を命ず(四月十二日附)
任助教授(七等九級) 高橋 一郎
醫學部勤務を命ず(同日)
任教授(四等八級) 助教授 堀尾 正雄
工學部勤務を命ず(四月十六日)
任教授(六等八級) 助教授 石黑 武雄
醫學部勤務を命ず(同日)
(六等八級) 加藤 直武
(六等十級) 西海枝東雄
任 教授(醫學部兼務)同日附 教授 舟岡 省五
評議員を命ず(四月十八日)

アジア歷史叢書
全十卷
大アジア民族の歸趨と史代轉換の史的現實
京都帝國大學名譽教授文學博士 矢野仁一監修
編輯責任者
東京文理大教授文學博士 有高巖
東洋文庫主事 岩井大慧
廣島文理科大學教授 鴛淵一
滿鐵本社調査室弘報課囑託 園田一龜
第六高等學校教授 內藤雋輔
東京女高師教授文學博士 內藤智秀
今や支那事變を境として東亞關係の出版物の氾濫時代を現出し、汗牛充棟も啻ならざる狀態であるが、茲に小社が敢然諸種の困難なる社會情勢を克服し斯界の最高權威たる京都帝國大學名譽教授文學博士矢野仁一先生責任監修に三十餘名の學者を動員し、前後三ケ年の日子を轉し、修史の雄事業を征してアジア歷史叢書全十卷を刊行する所以のものは、飽まで歷史を背景とし、地政學的環境にありて現實の實體を觀じ眞に時空一如の立場よりする必然性を究明、現實より理想への血路を打開し、その實現の確乎たる方途を明確に把握せしめんの大抱負にある。實に本叢書は斯かる意圖により悶然する所なき結實の顯現であり、綿密なる省察と至らざるなき研鑽は各權威の卓見と俟つて、捕捉し難き大アジア民族の歸趨を貫透し史代轉換の轉轍器たらしむ。
1 支那の歷史と文化 配本開始 定價二圓五十錢 送料十四錢
2 支那の社會と經濟
3 滿洲の今昔
4 動く蒙古
5 大陸奧地の變遷
6 ロシアの東方政策
7 桎梏の印度
8 東南アジアの史的展開
9 中アジアの風雲
10 西南アジアの趨勢
內容見本 呈上
申込規定
刊行期日 四月下旬第一回配本。以後毎月一冊宛刊行。
體裁と定價 規格B列6上製 毎號平均三〇〇頁內外 定價毎卷二圓五十錢內外のこと
頒布方法 申込金不要 自由分賣なるも用紙不足の折柄適正部數發行を期す爲め豫め購讀希望者の申込を受く。
東京市神田區駿河臺三 目黑書店 振替口座東京二八〇九番

岩波書店 新刊 東京市神田區一ツ橋二丁目
桑原武夫譯 アラン 藝術論集 B6判上製六三〇頁 定價二・六〇 送二二
「藝術論集」はアランの最も重要な作品の一つであり、且、最大の力作である。アランがこの書のなかで試みたことは、豫め措定された上位の觀念に依存して、全藝術を宗義しうるやうな普遍觀念を證明することではなく、デカルトによる想像力の學說を導きの糸として、各の藝術を作品そのものに基いて探求し、この偉大なる對象を、論理的ではないが、現實的なその體系的統一のうちに明瞭に知覺せしむることにあつた。從つてこの書は、美に關する比類のない理論の書たるのみならず、實際に諸藝術の制作に從事する人々に對しても數々の貴重なる指針を與へてくれる。譯業また十年餘の鍛骨の苦心になるもの、特に原著者が日本譯に寄せた長文の序を附しその完璧を期してゐる。
國語教育學會編 兒童文化論 B6判假綴二九二頁 定價一・二〇 送一五
現に吾々國民に課せられてゐる崇高な使命を將來にわたつて達成するためには、それに適應する國民的性格が鍛錬され、新しい國民文化が創造されねばならぬ。兒童文化の建設こそは、それら國民的性格・國民文化の形成發展を、その根柢に於て培ふものであるが、新しい課題であるだけに、今後の闡明に待つべき點が少くない。本書は理論と實踐の兩方面にわたつてそれらの點に闡明を與へ、以て兒童文化向上の一推進力たるべく期したものであり、兒童文化が如何なる理念の下に建設され、如何なる方法によつて實踐されねばならぬかに就いて、體系的に答へる淸新な論集である。內容目次 兒童文化の理念と體制(波多野完治)。兒童文化と國語教育(滑川道夫)。兒童文化の實踐(小川一郎)。
九大名譽教授工博 林桂一著 數値計算 B5判上製四一二頁 定價五・五〇 送二三
過般「高等函數表」を世に送つた著者は今回その姉妹篇として本書を大成せられた。本書は實に著者が數値計算に捧げられた半生の經驗に基くものであつて、說くところは極めて懇切。冪、階乘、指數、對數、圓、雙曲線等の初等函數より橢圓、球、ガンマ、ベツセル、ルジヤンドル等の高等函數に及びその計算法を詳述し、また現今計算數學に重要な位置を占めるベルヌーイ、オイラー多項式を取扱ひ、進んで級數特に漸近級數、函數値の總和法、內挿式、數値微積分等に亘つて說述してゐる。さきの『高等函數表』の使用者は勿論、數値解析に親しむ學徒は本書に依つて數値計算の方法と意義とを熟知せらるべく、待望に添ふ勞作である。
林桂一著 高等函數表 B5判上製三三八頁 定價五・五〇 送二一

「科學する」に就て

—識者よ、國語を大切に—

荒木俊馬

現時の非常時局に際して科學振興の聲が旺であることは洵に當然であり、また欣ばしいことである。しかし、それに便乘してまるきり見當違ひの方面に「科學」とか「科學的」なる言葉が濫用されることは甚だ歎かはしい科學の冒瀆であるといはねばならぬが、そのうちでも、現代の流行語の一つで洵に嫌な言葉は「科學する」である。新聞紙や雜誌などにも「何々を科學する」とか「何國々で科學する」などゝ書き立て、甚しいのになると「到る所に科學する心」などゝいふのがある。

一體「科學する」とは如何なることであるか。日本語にはこのやうな動詞の使用法は無いやうに思ふ。そこで「科學する」といふ言葉が、如何なる經路で生れ出たかを検べて見ると、どうも次のやうなことらしい。哲學における獨逸語にフイロソフイーレン（philosophieren）といふ言葉がある。これの譯語として西田幾太郎博士が「哲學する」といふ誠に以つて奇妙奇天烈な日本語を發明された。フイロソフイーレンといふ獨逸語を例へばヴエーニヒのハンドヴエルテルブフ・デア・ドイッチエン・シュプラーへで引いて見ると das Gründen, erkennen, schliessen, beweisen とあつて、同じ譯するにももつと何か適當な立派な日本語がありそうなものである。所で其は兎も角として、この西田博士發明の「哲學する」にかぶれて菅井準一氏であつたかゞ「科學する」なる途方もない言葉を創作してしまつた。さてこの「科學する」を再びもとの獨逸語に還元して見ると Wissenschaften となる。こうなれば丸でお話にもなるまい。現代日本にあつては諸事獨創々々と叫ばれてゐる時勢ではあるが「科學する」といつたやうな「非科學的」な語彙の濫造は唾棄すべきである。それを人もあらうに一國の教學の總元締である橋田文相が、文相就任早々から「科學する、科學する」と叫び立て、恰もこれによつて皇國科學の振興が出來るかの如く考へて用ゐられるのはさてどうかと考へざるを得ない。橋田文相たるもの、自重を希ふ所以である。そも／＼日本現時の非常時は皇道精神と日本文化の確立に緊急を要する秋である。その際、國語を大切にすべきはいふまでもあるまい。古來、皇國は言靈の幸多き國といはれて來た。何を苦しんで、日本文法を破壞するやうな、然して世の中を茶化したやうな「哲學する」とか「科學する」とかいつたやうな畸形な新語を發明する必要あらんやだ。

敢て駄文を綴つて、橋田文相始め朝野の識者の反省を促す所以である（二六〇一、四、一七）

蘭印の農林産物資源

沼田大學

中世の歐洲人は馥郁たる薫香を通して熱帶亞細亞への思慕の心が熾烈なものであつた。東洋の香料を商ふヴエニスの商人はいやが上にも懐を肥やしたものであつた。

今日ではその存在さへ一般に知られぬ、蘭印セレベス島とニユウギニア島との間にあるモルツカ群島、そのうちのさゝやかなるアンボイナ島は十七世紀の初めには香料島として知られ肉豆蔲、丁香を輸出して、爪哇のバタビアの繁榮と時を同じふして榮へたものである。しかしながら政府が如何に保護取締を行つても、天然資源は濫採されがちなものである。その結果は急速に涸渇を招き、最早栽培に依らなければ供給出來ないやうな情勢に早くも當面するやうになつたのである。

今日世界貿易に蘭印より出た農林産物は何れも栽培によりて生産されるものであり、往年の香料も生産しないわけではないが現下の温帶文明諸國に必要とされる各種工業原料の著しき膨脹により辛くも主要産物の後へに圧してる有樣である。元來蘭印は農業國である。その輸出貿易額より見ても、總輸出の七割は農林産物である。邦貨にして十六億圓、それに次で鑛産物が約二割七分の約六億圓であつて、その間には非常な隔りのあることが知られる。これ等農林産物のうち第一位にあるものは護謨であつて、斷然他より頭角を抜いて全輸出の四割に當つてゐる。然し乍ら世界生産に對しては馬來に一籌を輸してゐるが、新設の植林地が多く將來の世界一位は期して待つことが出來るだらう。輸出の第二位にあるものは古々椰子である。總輸出の約一割を占め、種子の仁を乾してコプラとし、また直接そのまゝ種子から採油もする。その油はマーガリン、石鹼用等に供せらるゝのであるが、今次歐洲戰爭勃發はコプラ又は油の歐洲への捌口が止まり、しかも米國は比律賓の古々椰子を保護する關係から護謨とか錫とかの大量買附はするが、コプラに關しては、全く振りむいてもくれない、一體蘭印での古々椰子は資本家のエステートよりも土人個々の栽培生産が集まつて大をなすものであるから、この輸出の不振は蘭印にとつては重大なものと言はねばならぬ。

輸出の第三位を占むるものは砂糖である、爪哇としては糖業の發展は古く、しかもかつては輸出の第一位にあつて、その額も十數億圓を超へてその他のものの追從を許さなかつたものであるが、前歐洲大戰を契機として輸入國の自國生産を促し、我國の糖業の劃期的發達も一部はその因をなし、悲しくも頽勢の一途を辿るやうになつた。

輸出の第四位が茶、第五位が煙草、第六位が油椰子、第七位が珈琲である。このうち珈琲は極めて古く政府の强制栽培命令によりて廣く栽培されるやうになつたが、元來本植物は亞弗利加の原産であつて、亞剌比亞に移植され、モカ珈琲の名を謳はれたものであるが爪哇に傳來し更に南米のブラジルに移り、今日世界の七割は其所に生産され、また南米のコロンビアにても新興の栽培植物となつて居り、かつブラジルの農園は爪哇珈琲の値段を左右される苦境にある。油椰子も同じく亞弗利加の産であるが、本植物が移入されたのは遠からざる過去である。從つて蘭印の新興栽培地なるスマトラに養はれ數年その生産額を增加してゐる。この椰子の種實から採油して、マーガリン。石鹼、或は蝋燭製造等に用ゐられてゐる。茶は傳ふるところによれば、その初め、日本より種子を招來されたと謂はれてゐるが、その大をなしたのは印度のアッサム種を移入植栽してからで近々四十年にして、世界の第三位の生産額に到達したのである。煙草の世界の消費量は想像に絶するものがあり、しかも年々その消費額を增加してゐる。この消費の驚くべき數量を米國だけについて見ることゝなるが一九一三年は三十億本の紙卷煙草が、一九一四年には百五十億一九一五年には四百六十億、一九二一年に五百二十億、それが一九三四年には千三百億への增加振りである。從つて煙草は各國に栽培されてゐる。蘭印ではスマトラに最も廣く栽培され、葉卷として世界一と稱されてゐる。

輸出の第八位はタピオカ、第九位がシザル、第十位が規那、第十一位がカポック、第十二位が胡椒である。タピオカとは、キャツサベ植物の根から採取せる澱粉で、食用澱粉とし、また工業的には織物用糊料および酒精用として大なる需要を有するものである。本來南米ブラジル原産のものであるが今日熱帶各地に栽培されてゐる。蘭印では一億土人の食料に供されてゐる。爪哇は人口稠密で有名なところであつて、蘭印からの輸出の第十四位には米があるが、爪哇では米が自給には稍不足の状態である。從つてキャツサベは食糧補給に對しても土人には非常に重要なものである。シザルはまたサイザルとも呼ぶアゲブ屬の植物繊維で、メキシコから中米地方の原産であるが、今日熱帶各地に栽培され、その繊維はロープ、又は包裝袋繊維用に、近來は織物原料ともされてゐる。世界生産の二割内外を蘭印から出してゐる。

規那は周知の如く皮からキニーネを製出し、マラリア病の特効藥として知られてゐるもので、熱帶地に植民地を有する國々では不可缺のものである。元來南米の原産であるが、今日蘭印で世界需要の九割を供給してゐる。カポックは錦葵科に屬する喬木で、その朔果に綿毛に包まれてゐる種子がある。この綿がカポックと稱するものである。效用はクッシヨンの塡充用また浮揚力に强いのを利用して、救命袋用に近來は紡織用にも利用され、種子は綿實と同じ食用油を採取してゐる。今日世界の七割は蘭印から供給されてゐる。最後の胡椒は周知の香味料であるが、これもかつては歐洲の垂涎措く能はざりしもので、ヴエニス、ゼノア商人の富を築かしたものであつた。今日蘭印より世界の八割を輸出してゐる。

これ等の規那、カポック、胡椒の如きは、蘭印に於ける輸出額に於ては他の重要農林産物の遙か下位にあるが、世界の輸出貿易の上より見ればいづれも第一位にして、しかも著しく獨占的のものである。その他の産物にありても大部分は第二位、第三位を占め、蘭印農林資源の如何に豐富なるかを知ることが出來る、なほ、これ等生産物の植物産地を見るに、もと／＼亞細亞の熱帶産としては、護謨、茶、古々椰子、カポック並に胡椒にして、嚴密に蘭印原産と推斷されるものは古々椰と胡椒の二種に過ぎないのであつて、護謨、キャツサベ、規那の南米原産、シザルの中米産、珈琲、油椰子の亞弗利加産にして大部分のものはいづれも渡來植物である。また、蘭印に於ける植物栽培企業の發達經過を見るにその多くは青年初期の状態であると云へやう。

爪哇は既に開發の餘地なきまでに利用し、企業の中心はスマトラに移りつゝある。更にボルネオの一部セレベスの一部にも移りつゝある。スマトラの開發成り、世界第二の大嶋とされるボルネオの開發成り、何全く未開發と稱しても過言でないニューギニアに手の着くのは百年の後であらうか、はた二百年の後であらうか。大東亞共榮圏の北には斯かる植物資源に缺くる日本あり、滿洲あり、支那ありである。徒らに拱手傍觀すべきであらうか。

近東は動くか

注目すべきアラブの動向

林三郎

世界情報

樞軸軍の北アフリカ作戰進捗およびバルカン戰役が明瞭化するとともに、世界の注意は近東に注がれんとしてゐる。こゝにいふ近東とは廣い意味でトルコ、アラビヤ半島の諸國の他にエジプト、イランをも含めた尨大な地域をさすのであるが、樞軸の次の目標が現在一般に豫想されてゐる近東作戰すなはちスエズ攻略、モスール油田地帶の占領にあるならば、これが實現は英國にとつて死活的重大事であるばかりでなく、これらの地域に住む民族の運命にもまた頗る重大な影響を及ぼすものなることと言ふまでもない、これらの地域に住む民族とはすなはちアラビヤ人を含む回教民族であり、またこの地域には豐富な石油の埋藏がある。石油、アラブ、回教、近東問題を解く鍵はこの三つであらうが勿論、その前提にトルコ、從つてソ聯の去就を考へなければならない。

トルコにとつての最大の脅威はソ聯であることもとより明白であり、トルコの去就はソ聯の動きによつて決定されるのであるが、今はこれについて述べる餘裕がない、ただ樞軸のバルカン制覇以後、英國と同盟關係にあるトルコが漸次樞軸接近の氣配を見せて來たことを指摘するにとゞめ、トルコ以外の近東各國との情勢を眺めよう。

◇

さる四月十九日、英國はバスラに兵を上げたことを發表した。上陸兵はインド兵である。この上陸の合法性を英國は一九三〇年の英國イラク同盟條約に求め、その機會をイラクのクー・デタに掴んだ。イラクではさる四月三日ガイラニ將軍の一派が親英のハシミ政權を打倒し、ハシミならびに攝政エミール・アブヅル・イラー等の親英派を國外に追拂つた。近東情勢はすべて情報不足—國によつては皆無—で、このクー・デタの性質も、排英親獨にあるか、或は單なる排英にあるか、または國內政爭に過ぎないのであるか、明かでないが、ともかく英軍が上陸してその兵力が增强されつゝある現狀よりイラクとしても公然反英態度を示せないことは明白であり、今のところ樞軸側情報以外に反英表面化を傳へるものはない。しかしわれらは一昨年四月のモスール英領事館燒打ち事件を想起する。

同事件は、前國王ガージ一世の自動車事故による急逝が英國側の陰謀であるとして憤慨したイラク民衆により行はれたもので英領事モンクメーソンはこの時撲殺された。この事實はイラク民衆の反英感情を證明するものと考へられるが、この氣持ちを植ゑつけたものこそ英國自身のアラビヤ人に對する背信である。オットマン・トルコ帝國治下のアラビヤ人が前大戰において獨立運動を起したのは英國の使嗾に基づくものである。すなはち一九一五年、當時のエジプト駐劄英高等辨務官マクマホン將軍はメッカの統治者フッセインに對し、大戰終了後パレスチナをも含む廣汎なアラビヤ人居住區域におけるアラビヤ人の獨立國家建設に援助する旨を約し、反土蹶起を慫慂した。彼らアラブは例のローレンスらの協力を得、遂に戰鬪の末トルコ軍をアラビヤの外へ放逐したのだつたが、それに對し英國の酬ひたものは一九一七年のバルフオア宣言であつた。バルフオア英外相はユダヤ人の富豪から金を借りるために、パレスチナをユダヤ人の祖國とすることを宣言した。マクマホン文書とバルフオア宣言の二枚舌、この背信行爲に端を發したパレスチナのアラブ族の反英大暴動は全アラブ族の支援を得て永年にわたつて續けられたが、英國の猛烈な彈壓の結果下火に向ひ、ことに今次戰爭以來騒擾のニュースは殆んど傳へられない。しかしアラビヤ人が今なほ强い反英思想を抱き、この地に對する英國の手が弛んだ場合再び反英獨立の烽火を揚げるは必然で、今は事態の推移を靜觀してゐる狀態と見るべきだ。

シリヤのアラビヤ人はすでに騒いでゐる。叛亂は三月以來とくに激化して來たが、その原因は食糧不足の不安につけ込むシリヤ國家主義者の煽動である。シリヤは一九三六年の佛國シリヤ協定で漸進的獨立を認められたが、佛議會はこれに批准を與へなかつた。今回の騒亂は佛國の把握力減退を機にこの佛シ協定の實行を迫つたもので、デンツ總督は自治範圍擴大といふ妥協案を提示してゐるが、シリヤ人の方は受け容れさうにない。エジプトが英國の實力を恐れて、消極的協力は行ひながらも、あくまで戰爭の局外に立たんと努力してゐるのは新聞の報ずる通りであるが、この他イブン・サウド王を戴くサウディ・アラビヤ國以下のアラビヤ諸國は一切鳴りを潜め、たゞ英國の傀儡トランスヨルダンのエミール・アブヅラのみが親英を强調してゐる。サウド王以下の今後の動きは極めて注目すべきものがある。

サーダバッド協定國の加盟國イラン、アフガニスタンの動向に關しては一切情報が入らないが、兩者、ことに後者に對する英國勢力はなほ牢固たるものがあり近い將來において大きな變化があるとは思はれない。たゞソ聯がトルコをドイツの手に委ねた場合など南下してイランに手を伸ばすべきは最も考へられることで、ソ聯側に否定されたとはいへ、日ソ中立條約成立の直後ソ聯イラン國境の緊張が傳へられたのは極めて注目すべきことであつた

社會時評

"松岡政談"

堀川直義

リフレッシュメントだかリクリエーションだか忘れたが、この意味に"政治談議"といふ譯があることを覺えてゐる。つまり床屋や電車の中で交はされる"政談"は以前社會運動の最も盛んであつた頃でさへ大衆のサラリーマン階級はそれ等に耳をかたむけもせず、たゞシネマを見たり、ダンスをしたり、お茶を飲んだりして樂しんでゐたものだ。ところが最近のサラリーマンはよるとさはると政談をやる。なるほどあらゆる娯樂面が縮小されて來てゐる今日、リクリエーションを政談に求める樣になつたと見られぬことも無い。

しかし果してそうであらうか。"大衆政談"がしきりに行はれたのは政黨華やかなりし頃で、その頃は僻村の農夫も、駐在所のお巡りさんも政談に花を咲かせ、それも政黨運動を通じて多かれ少かれ實踐性を持つてゐた。政黨がだん／＼不振の傾向を辿るやうになつて以來政談もやゝ衰へたかに見えたが、近來また政談がとみに活潑に行はれる樣になつて來た。

その理由にはいろ／＼あるだらうが、支那事變處理といふことが國民一人々々の身近な問題となつてゐること、大政翼贊實踐などゝいふ呼びかけに應じて國民が政治につながりのあることを自覺して來たこと、隣組などを通して政治實踐が可能な如くに想はれはじめたこと、米炭の配給をはじめ家庭生活までが政治と無關係でなくなつて來たこと、歐洲の戰局、三國同盟、南進問題、日蘇條約等世界の動きへの關心が高まつて來たこと等があげられよう。

さうして見ると政談必ずしもリクリエーションとは言へない。かうなればむしろ眞面目な政治議論であり、或る場合は言はずに居れぬ愛國の熱情であることもあらう。

二

「蘭印なんざあとつてしまはなちやあいけませんや」

「蘭印には石油が山とあるそうじやねえか、なあに一氣に南進しなくちやあ」

などはまことに景氣がよい。しかしかうした聲高い低調な政談を聞いて顔をそむける人がある。

「實際大衆の荒唐無稽な議論は聞いちやあおれん」

と。ところがかう批評する似非インテリが晝休みに喫茶店で何を語るか

「東亞協同体の理念は東亞各民族を首肯せしむるに十分とはいへない、東亞聯盟論は……」

などゝ雜誌で讀みかぢりの齒のうく樣な何何論をいくつも並べて、得々としてゐる。

ところがこの似非インテリの井戸端會議にこれまた顔をしかめて己れ一人を高しとする"われこそはインテリ"もゐる。しかしわれ一人を高みに置いて冷笑する人々も、さらに大きな立場から見れば實に輕蔑すべき態度ではないか。

結局程度の差こそあれ政談は政談で、それがその人の知識に應じて眞剣に行はれてゐるものであるならば、魚屋の兄ちやんの"床屋政談"もサラリーマンの"喫茶店政談"もいたづらに侮蔑は出來ない筈である。むしろかつて政治に無關心であつた人人が政談を行ふ樣になつたことを喜びたい。

三

最近といつてもこゝ數日の政談の多くはさる二十六日日比谷公會堂で行はれた「松岡演説」が話題になつてゐる。

「松岡さんはやつぱりえらい、大臣の職にありながら、あれだけズベリ／＼と言へる人は松岡さん以外にはないね」

「どうだい、役人の統制をやつゝけるところなく胸がすいたぜ」

といつた調子で、大衆の松岡人氣は壓倒的だ。一寸メータクに乘つても運轉手から「松岡さんは偉いですね」と"松岡政談"をもちかける程だ。ところが知識人層の多くはこれと反對である。

「松岡を買ひかぶつてゐた。なんと言ふ低調野卑な演説であるか。隣國を攻撃し、官僚をやつゝけ、統制の拙劣を難ずれば大衆から受けるぐらゐのことは馬鹿でも知つてゐる。それをぬけ／＼といつて大衆の人氣を得ようなどゝは低劣である。身を台閣に置くからには難ずる前に、自ら閣內の發言力でこれを是正實行すればよいのである。不言實行を主張する松岡さんであるならばなほさらしかあるべきである。いたづらに箔屬をあたへ大衆をあふるだけでは建設的でない。積極的論議といへば最後の天皇政治經綸論であるが、これとても神がゝり的表現にすぎない。「己れ一人が天皇主義の實踐特許の如き語言を弄するのは僭越である。しかもその口の下から"諸君が私の大臣であることを好まないならばいつでもやめる"などゝ大衆の人氣をひく樣な言をはく。あの輕々しさでは安じて彼に國政を委ねるわけには行かない」

と言ふのが松岡演説を非とする聲である。

にもかゝはらず松岡さんをヒットラー"さん"なみに偉いとする大衆政談は巷に氾濫してゐる。大衆政談は往々にして野心ある政治家の手に乘ぜられたり、淺薄なパンフレットや流言に左右されたりするものであるから十分な警戒が必要である。政談と輿論との關係については今こゝにのべる餘裕もないが、政談がついに一國の運命を決すべき賛否の鍵を握ることもあり得べきを思へば、大衆の政治關心の昂揚を喜ぶと同時に、政談を輕視すべきでないことをこの方面からも認識しなければならぬ。

書評

川野重任氏著「臺灣米穀經濟論」

桑原正信

「光と絲とに惠まれた島」——臺灣を旅行するものは到る處このやうな言葉を耳にし、また事實そのことを體驗するのであるが、然し惠まれたとせられるこの條件によつて臺灣農業及びそれの開發過程は極めて複雜多彩な性格を帶ばしめられてゐる。臺灣農業、特にそれの經濟的研究が、對象の飛躍的發展にも拘らず從來比較的低調的であつた所以のものは、正に對象のもつ此の複雜性に基く理論的處理の困難に歸せられるのではあるまいか。

この間にあつても我々は、矢内原氏の稀著「帝國主義下の臺灣」の如き劃期的勞作をもつのではあるが、然しこれとてもそこに主題的に取あげられたものは糖業資本の發展過程に止り、從つて米糖二產業の關係を相剋の形において一應把へられながらも、その一面たる米作の基底的關係が明かにせられなかつたが爲めに「糖業の將來」についても極めて實現性の乏しい一つの臺灣米價高による糖業會社の米作會社への轉化——を敢てせられるに至つたのである。それ故に相剋すると云はれる二大作物、特に從來の研究において副次的地位を與へられてゐたに過ぎない米作について、之が開發過程を具體的に考察することこそ臺灣研究に殘された課題なのであつたが、前著の出でて十餘年の今漸くにして新しき著者を得てこの課題に對し美事なる解答が與へられるに至つたのである。

臺灣農業は何者のイニシアティヴによつて開發せられたであらうか、開發主體を異にすることによつてその過程に如何なる特異の樣相が帶ばしめられたであらうか、更にこの事が如何に新なる問題を創出してゐるであらうか——これ等の解明こそ著者の意圖せる先づ第一の點である。一般に臺灣においては米作と甘蔗とは對照的作物として考へられてゐるのであるがこのことはこれ等二つの作物を發展せしめたる起動力についてみるとき愈々明かとなるのである、即ち蔗作については糖業資本による資本主義的開發が所謂「歐人農業」型として推進められてゐるに對し、米作については土着農業者の手による「土人農業」型として進められてゐる。かゝる對照の姿をヴィヴィッドに示さんがため、著者はこの種の著作には珍らしくも數葉の寫眞版を掲げてゐる。この新しい手法は著者が台灣出張中、親しく蒐集加工した數十表の統計數字に對して極めて効果的なる裏付けの役を果してゐる。

米作農業が「土人農業」型だといふ。だがそれは開發當初の性格たるに過ぎないのであつて、やがてそれの發展が國家的要求として現れるや、この「土人農業」は國家資本の活動にバックせられて新なる樣相を呈するに至る「水利の支配」「蓬萊種の創出と普及」「肥料集約の高度化」「栽培技術の改善」等々——これ等章節の一つ／＼において我々は農民の先頭に進む開拓者國家の姿を見ることが出來る。かくて著者が静かに描出した對照の農業は決してそれが單なる對照に止るのではなく、經濟的には互に他を拒斥せんとする性格をもつといふ意味において米糖相剋の問題として登場するのである。然しこの難問の解明も、先づ基礎工作として米糖二面の生產的基底關係を掘下げてある著者にとつては、難事ではなく「經濟の論理」と「政治の强力」との相剋の姿においてこれをくつきりと描いてゐる。

著者は進んで商品としての臺灣米の解明に移る。それの商品化過程、價格構成、流通機構等に關する百餘頁の章節がそれである。この點の研究として我々は既に八木博士の大著「米價及米價統制問題」をもつのではあるが、然し本書の性質上、臺灣米については傍系的地位を與へられてゐるに過ぎぬと云はねばならぬ。いま新著はこの問題を主題的に取上げ、統計資料を縦横に驅使し極めて精緻なる分析を試みてゐる。

このやうに讀來るならば、本書は臺灣經濟の開發に關する理論の書であると共にそこに採られた政策の意味的理解の書でもある。而して考察が「過程」を問題とする限り、それは必然一面において歷史的な姿をとらねばならぬのであり、かゝる意味において本書はまた臺灣經濟發達史とも見ることが出來るであらう。四百頁に滿たざる著作において、臺灣領有四十年に亘る臺灣經濟の理解と政策と歷史とが手際よくまとめ上げられてゐる本書を、類書中の白眉に推すことに私は聊かの躊躇をもなさないものである。

最後に希望一つ。臺灣は米穀移出管理政策の實施を界として一の重大なる轉換をなしつゝあるとみられる。本書においては故らに深く立入ることを控へたとされるこの問題を本書の續篇とし著者の立場から展開せられる日の近からんことこれである。（有斐閣・三圓八十錢）

新らしい品 よい品
藤田化粧品店
新京極

創造的知性の尊重

新明氏の「思想への欲求」

春江宣政

本書は新明氏の第二論集として第一論集「文化の課題」につぐものである。內容は「思想への欲求」「青年と學生」「新文化の進路」の三部卅二篇より構成され支那事變勃發この方のあわたゞしい轉換期の激動の中にあつて「東亞協同體の理想」の著者が步んで來た思想的遍歷の產物である。

私はかつて「文化の課題」について「この書を貫流するものは合理主義精神（知性）の尊重であらう」と述べたことがあるがこの基本的な立場は「思想への欲求」にあつても貫徹されてゐる。新明氏の社會學的な立場が創造的知性を發條として展開されてゐることは周知のことであるが、氏のこの根本的立場を具體的な事象に適用したものが本書を構成してゐる。諸篇である新明氏の新體制論が創造的知性の上に組織づけられてゐることが本書をして「思想への欲求」たらしめたものであり、創造的知性の態度が一貫して保持されてゐるわけである。

○……○

さて、轉換期といふ時代においては現實の表面に追隨することが容易であると同時に過去は過去として機械的に否定しさることが極めて無雜作に遂行されるに反し、この生活の隅々までも搖り動かす嵐の中に立つて時代の論理を提示し、論理の充足を要請し生けるものと死せるものを選別することは或る程度勇氣を要することである。しかもその論理がそれを生み出した社會に結びつけられ、青年の監視、知識の蔑視、思想への嫌忌（これらは主たる本書の對象である）を社會的な基礎づけから導き出すことは、多くの新體制論者の到底企及し得ないところである。とくに事變この方思想が蔑視に監視されて來たといふ不當な事情は「思想への欲求」を輕視し、あまりにも現實的な現實主義が政治に限らず、文化のあらゆる方面に浸透するやうな現象を來しつゝある。思想と云へば觀念的と排斥され、自由と云へば中傷されて治安的取締の對象と安易に觀念される狀態である。しかし思想は今や新文化運動の問題として知識人に課された死活的問題である。それにもかゝはらず思想への排斥が行はれてゐるといふことは、わが國の將來にとつて大きな障害といはなければならない。

知識は有害なる社會的贅肉であるといふ誤つた觀念は學生の知識の探究を蔑視し、知識人への偏見を培養する土壌となつてゐるが、學生への非難の原因が現在では少くとも營利的な教育機關、それと結びつく無能な學生の存在、無能な教育者、教育界に横行する派閥的不公平と切り離されてとりあげられてをり、さらに本質的には有能な青年が知識の門から閉め出されてゐるといふ社會的事情には少しも觸れてゐないのである。

思想への欲求は社會から切離されては解答を見出すことが不可能である。思想への欲求は社會との聯關の中に見出されねばならない。社會學者としての新明氏の精彩が、本書に見出され、教へるところの大いのもこれに基いてゐる。

○……○

しかし本書に對して望蜀の慾なきわけではない。客觀的事實との對照の中に巧みな說明を見出すのみではなく、さらに一步進んだ分析を望むところも多い、また氏のとる諸科學の王者としての「社會學」への評價についても異論を持つものであるがそれは他の機會に譲りたい（三笠書房・二圓）

新刊紹介

▼我等の行爲は我等を追ふ（上卷ポオル・ブウルジェ・工藤融譯）わが國の知識人にすでになじみ深い著者の小說であつて、その規模の大きさにおいて、內容の持つ深さにおいて「弟子」や「眞晝の惡魔」にも比すべく「死の意味」をも凌駕するものと言へる（一圓五十錢・白水社）

▼知識の惡魔（モーリヤック小說集・井上究一郎譯）ラシーヌとパスカルの深い傳統に培はれた文學精神をもつて誠實に書きつゞける作者モーリヤックの唯一の中篇小說集である（一圓五十錢・白水社）

▼貨幣的經濟理論の新展開（高橋泰藏著）最近の貨幣理論の性格とその發展とを明かにすることを主としたものであり、言はゞ學界展望的なものである（一圓五十錢・甲文堂）

日本神學校教授 桑田秀延著
基督教神學概論
A5判上製 約六〇〇頁 價五・〇〇 送・二三
基督教傳へられて七十年を經て、此處にはじめて纏つたその神學概論が現はれた。堂々八百枚を越える此の書は教會人にも學會人にも歡迎さるべしと信ずる。五月二十日頃發賣豫定。

日本神學校講師 淺野順一著
舊約神學の諸問題
A5判上製 二五〇頁 價二・五〇 送・一四
舊約神學の新運を志す著者が、その研究の素材の一端をここに發表したものが此の書である。すべて神學雜誌に發表したるものである。

福田正俊著
恩寵の秩序
菊判上製 二三〇頁 價二・五〇 送・一四
神認識の問題を恩寵の秩序にまで展開せる著者の第一論文集である。特に若き學徒に贈る。

松木治三郎著
使徒パウロとその神學
A5判上製 二五〇頁 價二・五〇 送・一四
宣教者パウロの神學を宣教の實際にある著者が解明せんとしたものである。此の種著作中の力作である。

松谷義範著
神學的人間の思考
四六判上製 二三〇頁 價二・三〇 送・一〇

松尾喜代司譯
ルターロマ書講解
A5判総布 六三八頁 價六・五〇 送・二三
ルターのロマ書講解の草稿の發見は二十世紀初頭に於ける基督教會の偉いなる事實であつた。此書は啻に使徒パウロの大書翰の講解であると云ふ事以外に、宗教改革前に、ルターには既に聖書解釋に於て後年の思想信仰を此の書中に示して居ることは驚くべきである。今や松尾牧師の多年に亘る原典よりの苦心の譯を上梓し得るに至つたことは快に耐へないものがある。

カルヴィン著 松谷義範譯
テモテ前書講解
B6判上製 三二〇頁 價一・八〇 送・一〇
聖書註解古典叢書の第三冊、此の書の價値については何の言葉をも要さぬと思ふ。原典より直接譯、譯者の筆いよ／＼熟し明解を極む。註及解說を付す。

K・バルト著 山本和譯
教會と諸教派
A5判假綴 八〇頁 價〇・七〇 送・〇六
一つなるべき基督教會に何故諸々の教派ありや、教會は合同すべきに非らずや等々の問に應へたるもの、譯者の原文についての精細を極めたる解說を付したり。

ヅウメルグ著 增田山永共譯
ジアン・カルヴァン
B6判上製 二三六頁 價一・四〇 送・一〇
偉大なる宗教改革の完成者、近代政治、經濟思想に大いなる影響を與へたる此の人の性格と思想を此の小册子に傳へるもの、此の著者にしてはじめて爲し得る處。

リカルダ・フーフ著 藤田孫太郎譯
ルッターの信仰
四六判美裝 三六〇頁 價二・〇〇 送・一〇
文學者のルッター觀—むしろ宗教觀と云つてもよい、これはたしかに今の我等がきくべきものである。

松谷義範著
飯（めし）
—食生活の問題—
B6判假綴 二〇〇頁 價一・〇〇（送一〇）
飯に不滿あらば讀め 飯に不安あらば讀め
君は滿足するであらう。君は安心するであらう。飯は食生活の根幹である。此書は現代文化と食生活の問題を批判し、問題の核心を衝くとともに、之が解決を示唆するものである。

小川正子著 **小島の春** 價一・二〇 送・一〇
青山一郎著 **獨逸の砂** 價一・四〇 送・一〇
浦野芳雄著 **ブルーノ・タウトの回想** 價一・八〇 送・一〇
土井八枝著 **隨筆 藪柑子** 價一・八〇 送・一〇
吉田喜久代著 **砂丘の蔭に** 價二・〇〇 送・一四

名ごりのゆめ
—今泉みね女聞書—
價一・五〇 送・一四
將軍家侍醫、德川時代蘭學の宗家なる桂川家の女なる著者の、幕末明治初期の思ひ出を聞書させるもので、尾佐竹博士、木村毅氏等の筆を揃へて激讚せるものである、近く小店にて再刷し大方に贈らんとす。（近刊）

長崎書店
東京市芝區西久保巴町三ノ七〇三
振替口座東京 七一八八六番

日本評論社名著選
東京京橋三ノ四
振替東京一六番

河田嗣郎	經濟學原理	[illegible]
高田保馬	經濟原論	[illegible]
高田保馬	經濟學概論	[illegible]
土方成美	經濟學	[illegible]
小泉信三	經濟原論	[illegible]
波多野鼎	經濟學入門	[illegible]
波多野鼎	經濟講話	[illegible]
波多野鼎	統制經濟講話	[illegible]
波多野鼎	現代の經濟學	[illegible]
メンガー著 安井琢磨譯	國民經濟學原理	[illegible]
中山伊知郎	ケインズ一般理論解說	[illegible]
杉本榮一	理論經濟學の基本問題	[illegible]
宮田喜代藏	生活經濟學研究	[illegible]
宮田喜代藏	貨幣の生活理論	[illegible]
福井孝治	經濟と社會	[illegible]
岸本誠二郎	價格の理論	[illegible]
山城章	價格統制の研究	[illegible]
大熊信行	政治經濟學の問題	[illegible]
高島善哉	經濟社會學の根本問題	[illegible]
本位田祥男	統制經濟の理論	[illegible]
本位田祥男	新體制下の經濟	[illegible]
國弘員人	統制經濟とカルテル・組合	[illegible]
森武夫	戰時統制經濟論	[illegible]
永田清	戰爭經濟の潮流	[illegible]
長守善	ナチス經濟建設	[illegible]
野間海造	日本の人口と經濟	[illegible]
荒木光太郎	インフレーション	[illegible]
滿鐵產業部	北支那經濟綜觀	[illegible]
滿鐵調查部	北支棉花綜覽	[illegible]
滿鐵調查部	北支農村概況調查報告	[illegible]
カザニン著 堀江邑一譯	支那經濟地理概論	[illegible]
杉本榮一	マーシアル經濟學選集	[illegible]
神戸正雄	全訂財政學大綱	[illegible]
井藤半彌	改訂財政學入門	[illegible]
本位田祥男	改訂英國經濟史要	[illegible]
高橋龜吉	日本資本主義發達史	[illegible]
深井英五	新訂通貨調節論	[illegible]
齋藤利三郎	國際貨幣制度の研究	[illegible]
杉浦治七	金融學說研究	[illegible]
ジムメル著 傍島省三譯	貨幣の哲學	[illegible]
吳文炳	信託論	[illegible]
小島昌太郎	綜合保險學	[illegible]
小島昌太郎	交通經濟論	[illegible]
大河內一男	社會政策の基本問題	[illegible]
風早八十二	日本社會政策史	[illegible]
馬場敬治	組織と技術の問題	[illegible]
末弘嚴太郎	法學入門	[illegible]
尾高朝雄	改訂法哲學	[illegible]
上杉愼吉	帝國憲法逐條講義	[illegible]
田畑忍	帝國憲法條義	[illegible]
佐々木惣一	憲法・行政法演習(1)	[illegible]
野村淳治	新訂行政法總論上卷	[illegible]
立作太郎	平時國際法論	[illegible]
廣濱嘉雄	日本的私法制度論考	[illegible]
清水玄	改訂健康保險法	[illegible]
杉之原舜一	不動產登記法	[illegible]
杉之原舜一	判例親族法の研究	[illegible]
西島彌太郎	手形法・小切手法	[illegible]
西島彌太郎	改正會社法	[illegible]
美濃部達吉	公法と私法	[illegible]
原龍之助	企業行政法概論	[illegible]
勝本正晃	擔保物權法論	[illegible]
尾佐竹猛	日本憲政史大綱上	[illegible]
尾佐竹猛	日本憲政史大綱下	[illegible]
吉富重夫	行政機構改革論	[illegible]
八重樫運吉	國防國家の理論と實際	[illegible]
吉川兼光	全體主義の理論	[illegible]
橘樸	支那社會研究	[illegible]
松岡壽八	支那民族性の研究	[illegible]
河合榮治郎	社會思想家評傳	[illegible]
河合榮治郎	第一學生生活	[illegible]
河合榮治郎	大學生活の反省	[illegible]
河合榮治郎	書齋の窓から	[illegible]
河合榮治郎	學生に與ふ	[illegible]
河合榮治郎	學生と教養	[illegible]
河合榮治郎	學生と生活	[illegible]
河合榮治郎	學生と先哲	[illegible]
河合榮治郎	學生と社會	[illegible]
河合榮治郎	學生と讀書	[illegible]
河合榮治郎	學生と學園	[illegible]
河合榮治郎	學生と科學	[illegible]
河合榮治郎	學生と歷史	[illegible]
河合榮治郎	學生と藝術	[illegible]
河合榮治郎	學生と日本	[illegible]
河合榮治郎	學生と西洋	[illegible]
鈴木梅太郎	改訂ビタミン	[illegible]
ホグベン著 今野山崎譯	百萬人の數學上下各	[illegible]
渡邊光	支那地理大系自然環境篇	[illegible]
近藤康男	轉換期の農業問題	[illegible]
四宮恭二	戰爭・食糧・農業	[illegible]
龜山直人	化學工業概論	[illegible]
川西正鑑	工業立地の研究	[illegible]
稻葉岩吉	增訂滿洲發達史	[illegible]
稻葉岩吉	滿洲國史通論	[illegible]
稻葉岩吉	支那近世史講話	[illegible]
近藤忠義	日本文學入門	[illegible]
石井誠	ブルック英國文學史	[illegible]
安岡正篤	漢詩讀本	[illegible]
高濱虚子	俳句讀本	[illegible]
佐佐木信綱	改訂萬葉讀本	[illegible]
穗積重遠	新訂民法讀本	[illegible]
土田杏村	思想讀本	[illegible]
鈴木梅太郎 井上兼雄	榮養讀本	[illegible]
小川太一郎	航空讀本	[illegible]
高垣寅次郎	商業經濟辭典	[illegible]
末川博	新法學辭典	[illegible]
佐藤寬次	農業小辭典	[illegible]
湯山昇	日華辭典	[illegible]
三木清	新版現代哲學辭典	[illegible]

數字の右は定價、左は內地送料、外地送料は定價の約一割

部長・本部役員きまる
いよ／＼陣容を整へて
新發足の同學會

大學の使命達成の補助機關として學生の心身の修練、相互の親睦ならびに生活の便益を圖り、以て國家的協同精神を涵養する目的を以て本年四月新しく誕生した本學同學會の中央部役員および各部長の詮衡は會長羽田總長の手で鋭意いそがれてゐたが、四月二十四日左の如く決定した、新態樣の部については未だ全部の委員が指名、選任されてないので、之を急ぐ一方部長の手許で新らしい企畫が建てられてゐる樣である

▼▼文化部▲▲

講演、學藝の二部を併合し、それに古美術同好會を統合して學內の綜合的文化部たるにふさはしい態樣をとりつゝある、專攻の學を大成するためにも、さらに一層廣き視野の下に人生を觀て、偏らざる一般的人間的教養を身につけ、而して現下の大轉換期に際して、高邁なる世界觀と明確な國民的自覺をもつて現實の諸情勢を的確に認識し、國家的使命達成のために建設的具體的準備が學生に要求されてゐる時、全學生の期待の中に新らたに文學部助教授高山岩男氏を部長に迎へてスタートを切つた文化部の前途こそ大いに囑望されるべきである、新企畫としては從來の講演、座談、見學、鑑賞に加ふるに今年度は連續した講座の設置が豫定されてゐる模樣である

▼▼映畫部▲▲

從來の學生映畫團體と言へば鑑賞およびその印象批評がすべての如く誤解されてゐたが、新らしく設けられた同部では文學部教授木村素衞博士と言ふ最適任者を部長に戴いて、大學々徒らしき高き標準を以て複雜混沌たる現象をレンズを通して洞察選擇する、直觀の綜合世界とも言ふべき映畫をもつて學生の教養を高めんと新しき企畫を實施して學生の期待にそふやう準備中である

▼▼航空部▲▲

航空が現時に於て占める地位に就いて語るの要は無からうが、創設された同部は部長に工學部教授藤本武助博士を迎へ、事業としては舊航空研究會で行つてゐた操縱練習をさらに高めるとともに專門の教官指導の下に研究會を開いて理論の把握に努める一方、座談會、展覽會の開催により航空知識の普及に努める樣である、國家緊急の時に當り同部の健全なる發展が望まれる次第でもある

▼▼保健部▲▲

人的資源と言はれ國民の健康が大いに問題にされ健康保全が叫ばれる時、健康が失はれざるに先立つて我々は進んでその價値を認識してその增進をはかり、それを失ひし者にはこれが恢復に萬全を期さなければならない、今回新に保健部が設置せられ醫學部教授三浦百重博士を部長に迎へ、その指揮の下に「學生健康相談所」と密接に連繫を保ちつゝ、諸積極的施設を講ずるとともに、必要の場合には醫學部および病院の援助をうけて學生の病氣療養に盡力し、又特殊の場合には「杉正俊氏記念事業會」の補助をも受ける樣である、同部の充實發展こそは我々のもつとも望ましいものでなからうか

▼▼旅行部▲▲

新設の部では無いけれども旅行、スキー、遠足の三部を綜合して新らしく發足した同部では各部の長所をとりすでに中村部長も參加して鷹ケ峰、金閣寺への遠足を第一回の事業として行つた從來の臨地講演を文化部に移した同部としては鍛錬的方面に向つてます／＼のびるとのことである

さて各部長の手もとで本月中頃までに委員の選任がなされ、常任委員が決定され、改組による部常務委員會が開催されるにいたれば同學會の活動も、いよ／＼軌道にのり本格的なものになるであらう

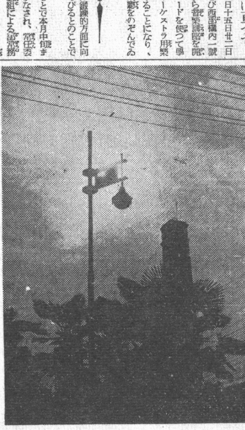
部長および本部員

部長、その他役員の顔觸れは次の如くである

▽文化部長（高山岩男助教授）
▽音樂部長（堀場信吉教授）
▽美術部長（川村多實二教授）
▽映畫部長（木村素衞教授）
▽新聞部長（八木芳之助教授）
▽柔道部長（大塚一朗助教授）
▽劍道部長（田中秀央教授）
▽弓道部長（堀江保藏助教授）
▽水泳部長（服部峻治郎教授）
▽端艇部長（田島順教授）
▽陸上競技部長（菊池秋雄教授）
▽野球部長（舟岡省五教授）
▽庭球部長（倉內吟二郎教授）
▽籠球部長（原田篠康助教授）
▽ラグビー部長（濱下俊一教授）
▽蹴球部長（原隨園教授）
▽旅行部長（中村直勝助教授）
▽射撃部長（佐々木申二教授）
▽馬術部長（井上碩教授）
▽航空部長（藤本武助教授）
▽共濟部長（澤井八洲男教授）
▽保健部長（三浦百重教授）
▽中央本部理事長＝長崎學生課長
▽同理事＝梶原會計課長、日高、光田兩學生主事、井上、妹尾同主事補

音樂講座
三回に亘つて

音樂部では五月八日十五日廿二日の三木曜日をえらび西部構內一號室で午後六時半から音樂講座を開催し、樂器やレコードを使つて學生明石讓君が〝オーケストラ用樂器の解說〟を試みることになり、多數學生諸君の來聽をのぞんでゐる



學內風景　京大寫眞クラブ・横木修

中村新太郎教授
めでたく還暦
記念事業に業績を出版

わが地史學の權威、本學理學部中村新太郎教授は四月二十一日めでたく還暦を迎へ本年停年教授のトツプをきつて、全學惜別のうちに教壇をさられるが、愛弟子たちは報恩の一端にもと同教授が過去三十年間孜々として調査研究をつゞけた平壤炭田に關する論文報告をまとめあげ還暦記念に出版することになり、三十餘年間の努力の結晶大成を急ぐ老教授を感激させてゐる

同教授は東京府出身、明治三十九年東大卒業後、廣島高師講師、農商務省、朝鮮總督府技師を經て大正八年京大助教授、大正九年より一ケ年間歐米各國に留學、歸朝後たゞちに教授に任ぜられ昭和十一年には歐米各國、海峽植民地に再度出張し地史學講座を擔任、現在學術研究會議會員で本年三月まで日本地質學會會長であつた

教授を地質鑛物教室の部屋に訪へば、白髮白髭の顔に柔和な笑ひを浮べて語る

學生に殘したい言葉は、大學に在學中大學の講義だけやればよいといふ考へは棄てるべきで、世の中は絶えず前進し續けるものであるから、それに立ち遅れないためには自ら進んで研究してゆくことが大事で、また社會に出ても學問的研究はずつと續けていつて貰ひたい、教壇を退いてからは大いに步き廻つて專門の地史學の研究を行ひたいが病身ゆゑそれもかなはす三男が北大の地質に入つてゐるから、身体の條件のよいときにそれを伴れて奈良近郊の山を廻りたいし、それ以外は今までの研究をまとめて本を書きたいと思つてゐます、京都には友達が少なく寂しかつたし、學校行政にも關係せず何も功勞はありませんでした（寫眞は中村教授）

今ぞくゞる登龍門
新學士の職場第一報
行政官と司法官

地方官第一課
法學士　服部習野

四月四日、內務省の出頭日、午前九時集合、人事課長の訓示の後に各自、任地長官あて紹介狀を渡される。これによつて始めて自分の任地がわかるわけで、始めから出身地、出身學校所在地等と全然無關係のところを選んであるとは云へ、聊か驚きだ。小生は全く思ひもかけず新潟縣ときまる。今まで廣島から廣島高校、京大と西日本ばかりにすごして來たことゝて、あまりの突然さに一寸吃驚したが、もとより覺悟の浮草稼業、[illegible]へばかへつて落つきを取り戻す。それから一同二重橋から明治神宮に參拜し、內相官邸の午餐會に行く。平沼內相の慈父のごとき溫情溢れる壯行の辭に、四十七名の若き地方官の頰は感激に紅潮する。一旦解散して六時から、人事課長の晩餐會。鼻柱の强い連中ばかりのことゝて飮むほどに氣焰當るべからず。「おい、君、廣島に行くんだつたなあ、行つたら高等學校の連中を可愛がつてくれよ」「君は新潟か、僕ア新潟出身だが高等學校の奴等が酒を飲んでも絶對お目こぼしを賴むぜ」

四月六日。白雪に蔽はれた上越の山々を越えて新潟に着く。七日。初出廳して辭令を貰ふ。「總務部縣務課兼地方課勤務ヲ命ズ」

警察行政を希望してゐたことゝて、こゝでも又々面喰ふ、さていよ／＼仕事の內容ですが縣務課は豫算と、市町村監督の二部に分れてゐて、小生は市町村監督の方に廻り、一郡を擔當させられる。すなはちその郡內にある町村の一切の認可申請を審査して許否するので、現在のところでは、寄附の許可申請が殆んどを占めてゐます。稅制は改革の過渡期にあることゝて、新稅制法の稅率の計算に、生れて始めて手にする算盤と取組んで苦心慘憺です。しかし中には改名の許可申請等と云ふ件もあつて頭を休ませてくれます。以上、何と云つても、この課の仕事は毎日年寄りの町村長或は町村役場相手の仕事だけに若い者にはあまり向かない仕事です。次に地方課は新設されたばかりの課で、市町村の監查をその主な仕事とし、課員は殆んど常に、縣內の各市町村に出張して、あらゆる角度から監查をするので、こゝの課員は市町村吏員にとつては、一番恐れられてゐます。小生もこの月の廿一日から三ケ町村の監查に出張を命ぜられてゐます。

その他、小生は綜合審查會幹事をも命ぜられてゐて、この方では縣令の原案審查の仕事が相當にあります。又この審查會は、知事、部長、有資格の高等官を以て構成する謂はゞ縣政の大綱を決定する最高機關で、目下は女學校の敷地移轉について審查を進めてゐます この肩書の前には、女學校長も平身低頭で、學生時代一人の女性にも頭を下げさせ得なかつた自分が、と、何だかお可笑くなります。

市町村の監督といふ地方行政は警察行政と並んで、內務行政の根幹をなすものですが、今までのところ、どうも算盤はじきが主な仕事で、相當にくさつてゐたのですが、今回念願が叶つて、來月から警察練習所で、行政法と經濟統制法の講義をすることになり、渡邊教授のノートを引張り出して、教授の溫顔を頭に描きつゝ講義の案を考へてゐます。

內務省の採用者四十七名中、內務省に二十名殘つて、あとは地方に出たわけで、したがつて全國の大きな縣に一人づゝになります。そして最近のやうに、見習期間が一年以內になると、新しい見習が行つた時は、前任の見習はすでに任官して他縣の課長になつて轉出してゐるため、地方に出た見習は全くの孤軍奮鬪ですが、又一方それだけ大事とられるわけです、本省で見習をするものも、任官のときは全部地方に出て府縣の課長をすることになつてゐます

けふ迄の入部受付
すでに三千餘名

本學通則の改正によつて、全學生の加入が規定せられた同學會では全員いづれかの部に參加する建前から目下入部の受附を行つてゐるが、今日までに約三千名の申込を受付けた、この結果は興味ある數字となつた、全學生組織へ向つて、その企劃の基礎を形づくるものとして注目せられてゐる、未申込の會員は至急同學會事務室に申込んで同時に學友會手帳を受取られたい なほこの手帳に本紙の引換券が綴込んである

斑鳩の文化に醉ふ
法隆寺の臨地講演

同學會文化部は、古美術同攷會との統合により、同攷會の事業であつた美術史講座を開催することゝなり、その第一回の事業として文學部源講師指導のもとに、法隆寺に臨地講演を行つた、すなはち二日夜樂友會館で、學生課自慢の新らしい幻燈を利用して講師の解說を行ひ、十分な豫備知識をもつて四日法隆寺に出向、模寫中の壁畫こそ觀ることを得なかつたが、大寶藏殿の新らしい光線の下で、百濟觀音、玉虫厨子以下の至寶を拜觀、夢殿の秘佛の開扉を願つて中宮寺へ向ひ、風薫る初夏の一日、會衆百餘名斑鳩の文化に接して懐かしい祖先の遺業に民族の誇りを感じたのであつた

前田鼎教授
三高校長に

森三高校長退官のあとをうけて四月十八日附で本學醫學部教授前田鼎博士が第十五代目の校長となつた

博士は滋賀縣の人、三高をへて明治四十四年本學醫學部卒業、直に醫學部助手となり大正四年助教授、同八年教授に昇進、その間二回にわたつて歐米各國にも留學し、また學部長に補せられたこともありわが國醫化學界の權威として知られてをり母校三高の名校長にならうと期待されてゐる、なほ本學教授は兼任となり依然醫化學講座を擔任する（寫眞は前田博士）

鍛錬に科學的メス
笹川教授の金曜講演

本年度最初の金曜講演は二日夜七時法經第一教室で「鍛錬の科學的檢討」と題して本學醫學部笹川久吾教授の講演があつたが、熱心な學生その他がおし寄せ、教授のグラフを用ひての興味ある講義に聞き入り、九時二十分それぞれ新知識を得て散會した

まづ長崎學生課長の挨拶があつたが、教授は大正十二年本學醫學部卒業引き續き副手、助手、助教授を經て昭和十五年一月教授となり生理學を擔當、高校より大學を通してボートの選手で鍛錬のことについては經驗者である

講演は特に平易に筋肉の修練、個体の鍛錬までを科學的に述べたがその要旨左の通り

生活現象をひき起すのは外部の刺激であるが最も能率の良いのを適合刺激といひ、一寸した運動等はこれに屬し、僅かの勞力で体力の增加は大きい、適合刺激より强いのを過激刺激といひ鍛錬がこれに屬しその勞力の割合に体力の增加のしかたが少ない、しかも、鍛錬よりもなほ强い刺戟におち入れば、体力は衰へて遂には死にいたることにもなり甚だ危險であり、又鍛錬をすれば病氣にかゝり易い身体が出來て、鍛錬すなはち運動選手の運動は科學的に見れば能率惡く、しかも危險である、この關係は心臟についても言へる心臟は血液が入つてふくれ、收縮により血を外に送り出すのであるが、あまり血が多量に入ると收縮力が反つて弱まる

運動は生物的刺激であるが、生物的刺激を與へれば一時は体力は弱まるが疲勞回復すれば体力が刺激を與へる以前より增し、刺激が多ければ增し方大なるも、これにも限度があり、それを越すと取り返しが付かぬことになる、鍛錬といふのはこの限度以前の刺激で、名人に達するとこの限度を越しても疲勞恢復して、これを理外の理といふが運動選手等で鍛錬がすぎて倒れるものあり、これを鍛錬の犧牲と稱しボートの遭難も一種の鍛錬の犧牲である、鍛錬をなせば疲勞困憊の狀態に陷し、發病の條件が具はり、鍛錬は種々の意味で惡いことになるが、あながち惡いことばかりではなく、鍛錬を續ければ運動性特異体質が出來て過激な鍛錬にも耐へられるやうになる、そして鍛錬により心身ともに鍛えなければならぬ、殊にスポーツにおいては鍛錬をして勝負に勝たねばならぬ、單に修練をなすだけでは駄目で、これは精神方面にも言へるであらう、國家においても鍛錬なき國家は亡び、何事においても同樣で鍛錬は大いに必要であり、唯疲勞困憊の發見と恢復とが大切であると、疲勞困憊を各自に配つたプリントにより說明し、それの發見と恢復の重要性を說き鍛錬を科學的のメスで解剖して聽衆に大きな興味を與へた

苦學生に優先權
共濟部の就職紹介

學年も改まつて同學會共濟部では多方面にたつて活躍し、着々成果を收めてゐるが、就職希望者法三十五、經三十、工三十、文十五、理七、農十四、醫十五計百四十六の多數に對し求人は約二十で共濟部では就職希望者の父兄に手紙で學資を問ひ合はせ、困窮者からさきに就職させてゐるが、今迄決定したのは家庭教師十名、臨時事務員二名、翻譯三名、筆耕一名で、家庭教師は高專受驗者が多く、中等學校の試驗制度の改革で日頃からの成績をよくせねばといふので小學生の相手も四、五ある模樣、家庭教師十の中法學部が七名ゐるのは法學部に苦學生の多いことを示してゐる、その外部でノートの切符を發行をしてゐるが、これは三省堂に手持のノートが三千五百あつたがそれを有效に分配するため切符制にし、その發行を取扱つてゐるので、要求者はすでに六百名に達した、下宿の斡旋も四月中には可なり多かつた模樣である

年俸と登廳と
法學士　中辻一之

司法官試補ヲ命ス
京都地方裁判所及同檢事局ニ於テ事務修習スヘシ
年俸千四百圓下賜

と四月十四日の官報は私の任官を報じてくれる。新任の司法官試補は百二十一名で、全國二十五ケ所の地方裁判所に配屬せられた。三月三十一日京大卒業、四月九日辭令交付、同十六日初登廳、同二十一日執務開始——といふと如何にも忙しさうだが、實は頗る悠暢だ。會社へ行つた學友は概ね四月一日から出勤してをり、前日の卒業式に出席して夜汽車で東上した人さへあることを思へば、三週間も餘裕があるばかりに聊か肩身が狹い。會社へ行つた人は試驗後休む暇もなかつたのに、と思ふと甚だ勿体ない氣がする。新入社員諸氏よ、しかし羨んで下さるな、私の四月分の俸給はチヤンとそれだけ減額してあるのですから。

試驗が終つてから一ケ月餘りもブラ／＼してゐたのだから、いよ／＼登廳するやうになれば大いに頑張つて——とハリキツてゐたものゝ、さて勤めてみると新米の悲しさ、さつぱり要領が分らない。上官の顔が分らず、役所の勝手が分らず、仕事の性質さへ分らない。することなすこと萬事マゴマゴしてゐる中に正午となり、更に午後四時ともなれば退廳時刻だ「どうも仕事が無さすぎて困る。これぢや稅盗人みたいだぜ」との嘆聲さへ洩れる。

とはいふものゝ、やはり大學時代のやうなわけにはゆかない。相當に氣骨が折れる。區裁判所の民事判事室に席を與へられたが、一擧手一投足を監視されてゐるやうな氣がしてなか／＼辛い。一寸便所へ立つにも氣がひける。況んや朝の登廳が遲かつたり、晝の散步が長かつたりすると、室の敷居が馬鹿に高い。會社と違つて、タイムレコーダーが無いだけまだ人間的であるのだらうが「タイムレコーダーのある所は隨分辛いだらうなあ」と同窓の學友のことが心配になる。しかしそれにしても「疲れたから地下食堂でコーヒを一杯」などゝは以ての外だ。

けれども自己の身分に矜持が感ぜられるのは有難いことに違ひない。第一に頂戴するものにしてからが、月給でなくて年俸といふから嬉しい。新しい希望と抱負とに燃えて颯爽と飛出た登廳第一日に地方裁判所長の曰く「朝は八時ですが、高等官には三十分の餘裕が認められてゐますから、まあ八時半までに來れば宜しい」こゝにおいて新任試補たるもの期せずして破顔に至らざるを得ない。だからもし人あつて「朝は何時から御出勤ですか」などゝ聞かうものなら一大事だ「オイ君、シユツキンなんて安月給取みたいな表現は止してくれ給へ。須らくトウチヤウと言つて貰ひたいね」

「登廳待遇」といふ身分は、大學を出たばかりで右も左も分らぬ身にとつては、かくの如く過分の光榮であるのだが、しかし判檢事の中へ入ると、さすがに一番末席だから有難くない。ものゝ哀れを最も痛感させられるのは省の食堂の方で小さくなつてゐなければならぬのは已むを得ないとしても判檢事の出入する毎に頭を下げねばならぬのみならず、待てど暮せど弁はサツサと他の人の所へ廻つてしまふ。試補は辛いものだと我ながらそゞろに哀れを催して、昨年度の先輩試補が食堂へ來たがらないのも無理はないと同情せざるを得ない。

さる四月九日に司法大臣柳川閣下から頂戴した辭令が、下宿の壁に貼られてゐる。從つて朝な夕なに眺めてゐるわけであるが、これを見詰めてゐると、幸福と感謝の念がひそかに胸の中から湧き上つてくるのを禁じ得ない。過去十ケ年、ひたむきに司法官を夢に描いて學んできたが、茲に目的の第一步を印し得た喜びは頗る大きい。そしてそれと共に人々への感謝が湧いてくる。親の恩があり師の恩があり、友の恩があり世の恩があり、更に君國の大恩がある。しかも報恩の途はたゞ一つ、今後の研鑽を除いて他に存しない。

ともあれ、京大新卒業生のうち司法官試補を拜命した者が僅かに五名とはちと情ない。司法官そのものが學生に對して魅力を喪つたのか、それとも高文の難關が司法官への接近を妨げるのかは知らないが、明年度以降本學法學部學生諸君の大擧して霞ケ關に押寄せられんことを冀望して熄まない。

哀涙鈔
—琵琶湖救難手記—
光田作治

四月七日　飛報至る。午後一時。四高漕艇班全員、大東文學士醫學部仁賀福富兩君と共に、今津白鬚間の湖上に行方不明。大津に急行す。妹尾主事補同行。縣廳にて渡邊警察部長と面談、長瀨刑事課長から情況の說明を聽く。夜來湖岸一帶に亙る警戒陣に未だ何の手がかりの無いこと、氣溫は寒冷で北西風の强かつたこと、大琵琶湖は未だ荒れつゝあつて船の出動意に任し難いこと、漂着か、漂流か、考への岐路に焦慮する中を、唯一つの情報として、今朝七時白石島の漁網にオールが一本かゝつたといふこと等々。云ひやうの無い心の暗さの中を石山の四高合宿に急ぐ。冊川教授默然として地圖を凝視せられ、時々吐くやうに與へられる指令に、本學端艇部員や四高出身者が八方に飛ぶ。數人の家族教授を圍んで凶報を吞む。十一の運命を托してけたゝましく鳴る警察よりの電話、伊崎寺湖岸に二本のオール、ミザラ二枚、充滿せるまゝの水筒の漂着を告げる。四高翠川教授森河教授來着、家族亦續々到着、西岸一帶の搜索無爲の報告に運命の糸を賭ける。沖の島にて、更にオール二本の漂着の報至る。漂着したオール五本、此の堪へ難い苦惱のうちに、天地は漸くタぐれむとし、凜烈の風はいよ／＼募る。瀨川部長來着、夜に入る頃、東湖岸一帶の搜索遂に無爲の報至る。茲に至つて第二段の搜索方針を議定する。家族の一部は島村に出向、一部は明曉四時大正丸にて舟木崎に急行に決す。去來するヘッドライト深夜の闇を衝いて繁く、寢臭の天地に悽愴の氣漲る。

四月八日　岡上四高校長來着。○飛行隊の通信聯絡によつて東湖岸に漂着物發見の報が入る頃、刑事課長より電話あり、遂に葉枝見村湖岸に主なき端艇發見の報を受ける。電話に集注せられた家族の耳に凶報を傳ふ。協議の上、安中先報家族に遭難確認全員の生存望み難きを發表する。暗然寂として聲を呑む。淚を拾えた斷腸の沈默である。遭難現場の確定と、搜査の前後策に就いて縣廳に出向、妹尾主事補は分れて東湖岸の搜査に發つ。正午渡邊警察部長に從つて湖東に向ふ。菜の花盛る中山道を長命寺湖岸に出ると、肌寒い程の慌しい救難船の動きである。波間にはためく新聞の社旗、各社の動員此の日百名を遙に超えるといふ。艇號にて沖の島着、警防團村民総出動の沿岸搜査、船着きのその群の上に見える船溜り——おゝ、艇がある——。折れた六番のオールと開いたクラッチ、あとの五本は異狀が無い。フックが一本、舵は無いが艇部の傷みは少い。上着一着その他等。水を吸つたそのまゝのシートを撫でて泣く岡上校長、凝然瞑目する翠川教授、群衆に淚見せじと共々に堪へる不自然の姿態。舷側に文字でもと探したが無益。促されて發艇。みはるかす夕映の太湖、對岸は遭難現場と推定せられる舟木崎である。湖上渺々ただに盛れ上る漫々たる水の連りである。無言の一群を乘せて艇は大津へ急行する。桑野造船所岩本氏の快諾によつて本部は擧げて同所に移動。五時半損傷無き舵を水底より發見の報至る。大溝町機橋沖合約千七百米、現場遂に確定せらる。次いで福富君の遺骸收容の報入る。母堂に隨伴して十一時大溝町着

四月九日　夜半零時、船上の遺骸に對面、雨を含む風加はつて明滅する燭火船燈の灯影飾く光を落す。四時部友に護られて納棺。了る頃湖面ほの／＼と白んで來る。曉の大氣を震はせる鐘聲一韻、無限の感動を包んで湖面に擴がる。朝霧をついて機動の音、沖の島堅田總出動の百數隻の搜査船群來着、美濃部大溝署長指揮の下に一糸亂れない活動を始める。遺品續いて上る。午前十一時半一抹の黑雲忽ちに湖面を蔽ひ、風浪加つて面を向け難きに至る。加ふるに突風相次いでさながらに難破寸時を偲ばす。署長の一令の下、綜船群一齊に沼に向つて避難す。荒れ狂ふ湖上今は一片の舟影だに無く、飛沫に濡れて地點指示の赤旗空しく、波の間に隱顯する。雨しぶく中を獨り湖上に對へば、不覺の淚至つて止め難い。長崎學生課長佐々木主事補と共に見舞に來着夕刻歸洛せらる。福富君の遺骸を妙琳寺に移して通夜。遭難原因の探求と搜査方針の確立の爲討議深更に及ぶ。寢ねられぬ鳩班の傳書鳩庭下に騒ぐ

四月十日　妹尾主事補湖東の用務を果して來着、搜査强行、考究し得るあらゆる方法を應用する。湖上凪いで搜査船の運航意の如く、遺族全員母船に乘つて現場に駐留。搜査の緊張漸く焦慮の色が濃い。一方妙琳寺に於ては懇な供養終つて、佐々木主事補淚と共に阿彌陀經を讀誦する。午後遲く署長組合長等と搜査船にて避難、その間船首に於ては遺品を列べ大溝宗教團の回向があり、大きく現場を一周する。徐行するエンジンの音夕迫る湖上に展びて人々の腑に泌む。此の日の搜索引上げの直前中川君の遺骸を收容、妙琳寺に二個の柩が並ぶ。夕刻樺太より福富君の嚴父令妹を伴つて來着、先づ此の椿事によつて漕艇の前途に不安の生ぜむことを慮る。靈前に新らに燭を點じ、香を焚き、默禱しばし、頭を擧げて「不二男」と大きく二聲、滿堂肅を震はせて聲を呑む。夜氣沈々として深まり、冷氣漸く[illegible]に迫る。筆者は、紙幅を慮つて茲に此の抄錄を斷つ。冊川教授の言を以てすれば「今回の事は湖に於ける不測の交通事故である」大東仁賀兩君の豐富なる經驗と周到なる用意と、加へて全國優勝クルーの技能に於て、なほ此の悲しみに直面せざるを得なかつた。正に天災に近いものと云ひ得られよう。それだけに有爲の失はれた若い生命と更に遺族の心中に思ひ到つて堪へ難いものがある。一方精神に徹して孜々として努を惜しまず、各人爲すべきを果した藤谷先輩以下本學端艇部員をはじめ、協心戮力文字通り寢食を忘れた四高關係者の活動は、縱横に貫く漕艇精神の顯れとして銘記しなければならない。事の起るや晝夜從業員の全部を提供せられた桑野の岩本氏、激浪の飛沫に濡れて搜査に自らを忘れられた唐木組合長以下搜査隊の各位、風雨の眞只中に立つて全町を督せられた上原町長など、其の時々の貴い姿は、湖岸に寄せた哀しみの淚の色に頑なつて幾久しく當事者の眼底に殘る。諸方面から寄せられた懇情と併せて茲に記して心よりの謝意を捧げる。峨嵋比良を背に、漫々たる太湖に眠る十一の英靈、希くは永遠に吾が湖畔の誇りたらんことを。

思想と健康と食物の講演
今夜日佛學館で

思想と健康と食物との相關關係を闡明して、時局下食糧問題のかまびすしき折りから學徒の三省をうながすべく京大學生を對象に、今夜六時からお隣りの日佛會館で澤瀉教授をはじめ左記諸氏の講演あり、多數學生諸君の來聽、批判をのぞんでゐる

▼戰慄すべき學生戰線の異狀（無双原理講究所長＝櫻澤如一）
▼學術、藝術、食物における民族主義（關西學院教授永島吉太郎）
▼万葉人の健康と食物（本學教授—澤瀉久孝）

全關西籠球大會で
本學五年連霸

本學籠球部では優秀なる多數の新人をむかへたので、四月廿七、八、九の三日にわたり、一回生のみで第十五回全關西籠球大會に出場、堂々五年連續の偉業を成就して新人の意氣をしめした、その戰績左のごとし

優勝戰　京大57（35—22 22—13）35 GB倶

反則	得點	京大		GB	得點	反則
2	10	瀨中	F	山本	4	1
0	0	宮本				
2	20	田幡		澁谷	12	0
0	0	小山	C	竹內	0	1
2	14	白野				
0	4	松田	G			
1	1	尊田		藤井	9	1
0	0	澤村		宮畑	2	2
1	8	黑田		福井	8	2
8	57	計			35	7

25 FG 15
7 FT 5

蹴球部四月の成績

▼二十五日　午後二時開始
本學0（0—0 0—2）2京都サツカー

▼二十七日　午後二時開始
本學8（4—1 4—0）1阪大

蹴球部の試合日割

▼十一日（日）關西學生トーナメント第二日　對京都藥專　於花園一時半より
▼十八日（日）關西學生トーナメント第三日　對神戸高工　於花園一時半より
▼廿五日（日）京都リーグ　對同志社高商　於京都藥專　一時半
▼六月一日（日）關西學生トーナメント　一時半於花園グランド準決勝ならびに決勝戰

ラグビー部の戰績

三月十名の優秀選手を送り出したが二十名に近き新入部員を迎へ、石黑新主將を中心に、改進期にある日本ラグビー界に貢獻すべく新しく出發四月十九日（土）新人對舊人戰を決行、新人中には優秀者あれども未だ練り足らず大敗す

二三回生47—3新人

四月二十四日
京大（新人）41—11同志社高商（本學メムバー）
F.W [illegible]　H.B [illegible]　F.B [illegible]　FB [illegible]

四月二十五日
京大（二、三回生）51—3第三高校
F.W [illegible]　B.H [illegible]　F.B [illegible]　F.B [illegible]

四月二十六日　全員舞鶴に遠征、海軍機關學校の大歡迎を受く

四月二十七日
京大（A）39—19海軍機關學校（A）
F.W [illegible]　H.B [illegible]　F.B [illegible]　F.B [illegible]
京大（B）24—19海軍機關學校（B）
F.W [illegible]　H.B [illegible]　F.B [illegible]　F.B [illegible]

陸上部大會日割

▼十一日午前九時　京都學生陸上競技大會　於植物園
▼十七日午後一時半　本學一、二回生對同志社高商　於本學

化學實驗學

監修
京大名譽教授 理學博士 大幸勇吉
阪大名譽教授 理學博士 眞島利行
東京帝大教授 理學博士 柴田雄次

全二十五卷　既刊七冊　以下續々刊行　菊判上製クロース裝函　內容見本進呈

第一卷 化學實驗總論（第二部第一卷と共通）
物理化學の研究 片山正夫—無機・分析化學研究雜考 柴田雄次—有機化學研究の心得 眞島利行・朝比奈泰彥・佐々木隆興—化學實驗室並に通風室 加藤多喜雄—分光化學實驗室及び寫眞暗室の設計 原井?三—恒溫恒濕實驗室 清水定吉・西藤一郎—化學計算法 西岡貞一—一般基本操作 硝子細工 漆原義之—眞空實驗法 野口喜三雄—恒溫槽 小穴進也　價六・五〇

第一部 無機篇

第二卷 物理化學Ⅰ
氣體の粘度 安積宏—熱擴散分離法 佐藤一雄—蒸氣壓の測定法 柴田善一 円羽貫知藏—鹽及び水系の多相平衡研究法 大幸勇吉—電氣傳導度測定法 山口與平、宍戸俊助—可逆電池に依る化學熱力學的研究法 石川總雄—鉛蓄電池とその取扱ひ方 篠川眞男—磁氣化學實驗法 武井武　價七・七〇

第四卷 物理化學Ⅱ
表面張力 玉蟲文一—吸着と收着 永海登—リーゼガング現象 伊勢村壽三—薄膜の化學 赤松秀雄—泡沫現象 佐々木恒孝—ゾルとゲル 佐野保—超音波の應用（膠質學に於ける） 佐多直康　價七・五〇

第九卷 分析化學Ⅰ
化學天秤使用法 南英一—重量分析 加藤多喜雄—金屬材料定量分析法（鐵鋼） 斯波之茂—金屬材料定量分析法（非鐵） 道野鶴松—珪酸鹽の化學分析 岩崎岩次—稀元素鑛物分析法 畑晉　價九・三〇

第二部・有機篇

第二卷 基本操作篇Ⅰ
一、一般操作法—加熱、冷却、乾燥、攪拌、振盪、縮壓 後藤良造—抽出、濾過、洗滌 久保田尚志—透析、限外濾過、電氣限外濾過、電氣滲透、電氣泳動 赤堀四郎、林鼎彌—加壓器（オートクレーブ他） 遠藤彰—濃縮、蒸發、蒸溜・分子蒸溜、昇華、乾溜 村橋俊介—溶媒、脫色、鹽析、沈降、再結晶 田村國三郎—吸着法、クロマトグラフ 桑田勉—ガスの製造法及び精製法 古川淳二—二、有機物分析法—微量分析、元素分析（マクロ） 村橋俊介 田村國三郎—三、微量物取扱法　價八・〇〇

第四篇 反應篇Ⅰ
有機化學文獻調査法 眞島利行—酸化 野副鐵男—脫水素反應 久保田尚志—還元 川谷貞一—接觸還元 遠藤彰—電解による酸化還元及び置換 江見治一—生化學的酸化及び還元 金子武夫—アルカリ溶融 村上増雄—フリーラヂカル 星野敏雄、槇尾晃—同位元素による反應機構の研究 千谷利三・小泉正夫　價一〇・〇〇

第六卷 合成篇Ⅰ
炭素二重及び三重結合 漆原義之—過酸化物オゾニド 畑一夫—オキソニウム化合物 岩垂孝一—ハロゲン化合物Ⅰ 柴田林之助—水酸基・アルコキシル基 久保田勉之助　價七・五〇

物理實驗學

東京帝大名譽教授 理學博士 中村清二監修　全十二卷（別卷總索引）

第一卷 物理實驗總論
研究者の心得—物理實驗心得—物理實驗室裝備—度量衡—計測論—物理記錄法—物理機械

第二卷 一般物理實驗
說明實驗—一般物理實驗（一）（測定法・物性・熱・音響）—一般物理實驗（二）（光學）—一般物理實驗（三）（電磁氣學）

第三卷 基礎的技術
物理計算法—眞空技術—ガラス及びガラス細工—金屬材料—ガラス鍍金法—應用物理實驗

第四卷 彈性及び音響
彈性實驗—粘性實驗—空氣力學實驗法—音響（前篇）—音響（後篇）—超音波

第五卷 熱學及光學器械
高溫物理學—低溫物理學—光學器械—光學レンズ—光學ガラス及び加工法—光高溫計—光度計

第六卷 光學
分光器—干渉計—寫眞測光學—複屈折及びカー效果—ファラデー效果—色—紫外線・赤外線—結晶光學實驗

第七卷 電磁氣學
電氣諸單位—電氣機械器具—電氣測定—眞空管—無線電信電話

第八卷 原子物理學（上）
原子物理學概論—原子スペクトル系列分析—スペクトル線の超微細構造分析—ゼーマン效果及びシュタルク效果—分子スペクトル分析—ラマン效果—質量譜分析器—同位元素の分離

第九卷 原子物理學（下）
放電管—光電管—X線—X線結晶分析法—陰極線と其の應用—陰極線の廻折による分析

第十卷 原子核物理學
原子核物理實驗學概論—天然物放射能—放射性物質—原子核の人工轉換—放射線—宇宙線

第十一卷 氣象學及び地球物理學
氣象觀測心得—渦卷の實驗—空中電氣—天氣圖の作り方・見方—地下探査法—海洋物理觀測法

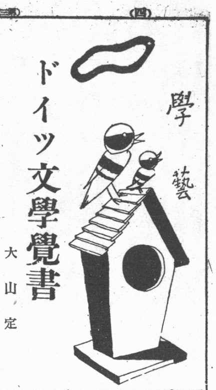
第十二卷 地球物理學及び天文學
重力—地磁氣・地電流—地震—天文觀測心得—天體分光學—天體寫眞—經緯度及び時の測定

別卷 總索引

A5判上製クロース裝　定價各五圓五〇錢　別卷三圓五〇錢　〒一四

內容見本進呈
目錄進呈
東京市日本橋區通三ノ一
振替東京一〇八〇二番
河出書房

學藝



ドイツ文學覺書

大山定

ニイチエはドイツにはすぐれた散文が非常にすくないと言つてゐる。エッカアマンの「ゲーテの對話」を「ドイツにある最善の書物」だといひ、ニイチエは或る時かう書いてゐるのである、ゲーテの著作、就中「ゲーテの對話」を除いて、ほんとうに人々が繰りかへし讀誦出來るドイツの散文といへば、リヒテンベルクの「アフオリズム」とユング・シュテイリングの「傳記」第一卷とシュテイフタアの「晩夏」とケラーの「ゼルトヴイラの人々」ぐらゐがあるだけだ」と。ニイチエのやうな意欲の饑餓をつくした人間か、却つてかかる一箇の謙讓な作品に素朴な喜悦を味はつたといふのは、見すごし難いとおもふのである。

僕らはドイツ文學といふと、すぐ饒舌なほど「問題性」を感じる。ヘッベルは「プロブレマーティッシュなものがポエジイの生命と息吹であり、その唯一の源泉であると言へるだらう。出來てしまつたもの、すでに了つたもの、靜かに自適をたのしむもの、などは決してポエジイを高めるものでない。迫られた生命の危急、精神の内部の破綻がポエジイの課題である」と書いてゐた。いかにもこれはドイツ詩人らしい立言にちがひない。僕はすぐれたドイツの文學作品にはいつもヘッベルのいふやうな痛切な苦悶があつて、それがつよく僕らのこころに迫つてくると思ふのである。僕らがドイツの詩人の作品に接するとき、まづ何よりもその哲學的な世界觀の深さをさぐらうとしたり人物の持つ生活や思索の突きつめた眞剣さをもとめようとしたりするのは、さしづめこのあたりに原因があると言つてよいのにちがひない。ヘッベルはさういふ意味で大へんドイツ的な作家であつた。彼は構想雄大な世界的な戯曲をいくつも書いてゐるし、そのためにパントラギスムスといふ非常に難解な旗じるしを立てたのであるがあらゆる點においてヘッベルはむしろドイツ臭い詩人であつたと言へるだらう。

しかるに、ニイチエがわざ〳〵指名した「晩夏」の作者シュテイフタアは、ヘッベルの作品をグロテスクだと言ひ、友達への私信のなかで「人々がヘッベルに詩人といふ冠をきせたり、本氣でヘッベルには偉大なものがあると言つたりするのをみて、僕はまつたく驚いた」と書いてゐるのである。

シュテイフタアは生活の謙讓や平和を何よりも深く愛した作家なのだ。彼は或る自作の短篇集の序文に、人々は屋根を引き裂く稻妻や激浪を打ちあげる暴風雨や火を吹く山などを偉大だといふが、僕は却つて無心な水のながれや野原をわたる微風や雜草の成長などが偉大だとおもつてゐる、何となれば異常な出來事はむしろ極く一面的な力が産んだ單純な結果にほかならぬからである、といふ意味のことを書いた「僕は人類を支配する普遍な、大きな、穩和な法則を發見したい」といふのが、シュテイフタアの作家的念願だつたのである。だから彼は日常の無風な、それゆゑに却つて深奧な人間の生活を、うつくしく、潔癖に、ゆがみのない線で描寫した「晩夏」といふ小說はそのやうな方法で書かれた作品なのである。

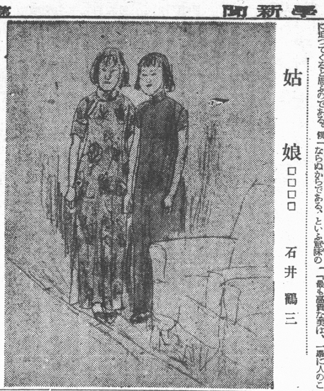
ニイチエみたいな強烈なドイツ精神がヘッベルの世界觀的作品ではなくて却つてシュテイフタアの文學の平和や靜寂を愛したといふことに、僕は一層深い「美」のドイツ的問題があるとおもふ。言葉をかへていへば、ドイツ文學の最も根柢的な、最も困難な本質の問題は、重壓的なヘッベルの作品ではなくてゲーテやユング・シュテイリングやシュテイフタアやケラーなどの清澄な、深いかゞやきを持つ作品に呈示されてゐるとみなければならぬのである。

嘗つてあれほど固くワーグナアと結んだニイチエが、なぜワーグナアから離れてゆかねばならなかつたか。そして、偶然ビゼーの「カルメン」を聞いたニイチエが「ビゼーは僕を賢らせる。すべての良いものは僕を賢らせる」と言つたり「この作も救濟する。決してワーグナアだけが救濟者ではない」と言つたりしなければならないのは何故か。そして、ニイチエは次のやうな文章を書いたのである「最も高貴な美は、一擧に人のこころを奪つてゆくやうなことはない。あらしのやうに襲ひかゝつたり酒のやうに醉ひ痴れさしたりしないのである（却てさういふ種類のものは嘔吐を催すことがある）眞に高貴な美は、しづかに滲透してくる。さういふ美は、殆んど誰も氣づかない。ふといつか夢のなかで一度見るだけかも知れぬ。しかしそれは、いつまでもつゝましやかに僕らの心のうちにそつとしのんでゐて、つひに知らぬ僕らの全身をひたしてしまふのだ。僕らの眼には何かわからぬ涙がうかび、僕らのこゝろには何かわからぬあこがれが一ぱいになる……」

ドイツの藝術や文學といへば、何か鈍重なもの、思辨的なものただまつ正直なものを連想するかも知れぬが、僕はかういふニイチエの「美の悲願」の切なさを見のがしてはならぬとおもふのである。バッハやモツアルトの音樂のうつくしさには、これが非常に純粹にあらはれてゐると思ふが、どうであらうか。或は、僕はローマで毎日ほとんど畫ばかり描いてゐたといふゲーテをおもひだしてみてもよい。ローマをたづねてゲーテは、レオナルド・ダ・ヴインチよりも、ミケルアンゼロよりも、ラファエルに一番つよく惹かれたのである。このことは、當時の美術愛好家がラファエルを最も多く讃美してゐたといふただ一般に趣味の變遷を說く歷史的解說だけで片づけてはならぬのである。ラファエルの畫のまへに立つたゲーテは、そのまゝビゼーを聽くニイチエの姿にほかならぬのだ。やはりゲーテもかう書いてゐる。「レオナルドやミケルアンゼロはその長い生涯のあひだ、彼等の才能のこの上ない高い飛翔にもかゝはらず、藝術活動の眞の愉樂にまで達するに到らなかつた（中略）ラファエルはこれに反して、その全生涯を通じ、常に同じ、容易さをもつて仕事をしてゐる。心情の力と實行の力とが彼にあつては全く整然たる均衡をたもち、近代の藝術家でこのやうに純粹に完全に考へたものはなく、このやうに明白に自己を表現したものはないと言つてよい」

僕は「フアウスト」のなかの「止まれ、おまへはいかにも美しいから」といふ切ない聲のひゞきをこゝに聞くのである。僕らは「フアウスト」第二部の「ヘレナの悲劇」を書いたゲーテの意圖をこゝに辿ることが出來るかも知れない。さきに僕はニイチエの「美の悲願」といつてみたが。このやうな大きな捨身がドイツ文學の根柢の深いかゞやきをつくつてゐることは忘れてならぬのである。

ゲーテが屢々口にした「救濟」だの「諦念」だのいふ獨特な觀念には、この深い捨身の大きさが一筋に疊みこまれてゐた、と僕はおもふのである。僕は一途にデモーニッシュな美をもとめる精神の切なさが、ドイツのすぐれた作品の底にはいつも深く湛へられてゐることを述べたかつたのだが、短文意をつくさぬところが多い。ニイチエはまた「美を見るとき、僕らは一体何にあこがれるのか。ただ美しくあることだけである」と書いた。これは甚だ容易ならぬ言葉である。僕はかういふ言葉がこみあげてくる大きな精神の內部を考へねばならぬのである。



姑娘□□□□　石井鶴三

紅葉谷日錄抄

京都伸夫

月　日

歐洲へ春風ひらく頃の舞臺稽古の日。拓務省拓北局のSさんが來られる。一緒に稽古を見る。この歐洲の原作は去年から映畫にするために書いてゐた第二稿目を使つて貰つてゐる。新聞記事で十行の素材を見つけ、今だにそれに嚙りついてゐる。最初に枚方の日滿女塾を見た。材料が澤山、集まりだすと、慾が出て、內原訓練所を是非見たいと思ひ出した。昨年の十月下旬、とりあへず拓務省拓北局と滿洲移住協會へ行くことになつた。話を聞いてゐる內に、さらに大げさになつてしまつた。材料もスーツ・ケース一枚になつてしまふ。移住協會のGさんと、內原行を變更して信州へ行くことになつた。長野縣でやつてゐる桔梗ケ原女子拓務訓練所を見るためだつた。この訓練所の規模の大きさと、設備の立派さに驚いた。二萬坪の地域に日輪兵舍が建ち、五棟の寮舍が建つてゐた。これで朝から晩までの生活を見學して來た。とくに朝禮の嚴肅さには頭が自ら下つた。皇國運動や、彌榮！の聲は既に霜柱の立つた十一月初めの日本アルプスの聳える空にこだました。歸宿して第二稿を作り、二月の始めに、滿洲移住協會主催で、關係官廳側、民間側の人達の御好意で、シナリオ檢討會を開いて頂いた。五月の、いちどきに花開く北滿ロケが內定した。座談會の意見で、さらにシナリオを書き改め、やつと第三稿が出來たところであつたこのオリヂナル、シナリオには、米殼業者の滿洲歸農の問題を扱つたりしたので、間口がひろがりすぎて困つた。しかし、この仕事はとことんまで粘りとほしたい。

Sさんをお送りして大阪へ出る叡山電車を驅つて歸る。

月　日

寝すぎ撮影所へ行く。撮影中の南十字星の宣傳を引受けさせられてゐるので、近日完成の通信記事と、雜誌への廣告原稿を作る。新體制だから、遊んでゐるものは皆手傳へといふのである。やつとこさ、シナリオを書き上げたと思つたら、宣傳を手傳へと言ふのである。滿洲もの〻仕事をしながらも宣傳の仕事の方が氣にかゝつて、夢にまで見たほどだつた。その宣傳の仕事も、もう今日で終る。

何故か氣持がざら〳〵になつてゐる。三百枚にもなつた假題春歐開花を五〇枚縮めることは今日は所詮、出來さうもない。

苗床の世話をしたり、草花を植かへたりして夜になつた。

七時から常會をする。自分は、昨年の末から隣保代表を仰せつかつてゐる。毎日、家でブラ〳〵してゐるから暇だらうと思つて、向ふ三軒兩隣りから推薦された。もつと適當な人がある筈だが、皆、尻込みして話があかない。結局、一番若い自分の處へ持つて來たのである。年期は二年である。未だに世間では自分のやつてゐるやうな仕事には理解を持つてくれないだから自分のゐる撮影所の人たちの中で、三人も隣保代表がゐる。朝出て夕方歸つて來る勤め人は、傍から見ると、大變忙しさうに見えるらしい。しかし、引受けたからには何とかやりたいと覺悟だけ決めた。德永直氏の東京の片隅を讀んだりしてせい〴〵知識をあさつた。仲々この仕事は六ツケ敷い。やればやるほど限りがない。未だに井戸端會議式な話題に華が咲いて困るのである。切符のこと、共同耕作のこと、共同の團體を拵へることや決めて、十時前に終つた。紅葉谷の山の中だからといつて、こんな風では濟まされないと思ふのだが、あせらずに何か、慰安のある仕事をしたいものである。

月　日

正午に、中部軍司令部情報部の懇談會に出席する。陸軍記念日に戰陣訓を上演した吉本、新興、松竹少女歌劇、寶塚歌劇などの責任者、作家、演出家が集まつて、大阪城內天守閣で懇談會があつた。なごやかな集まりだつた。自分はかうした集まりには始めてであつたが、大變、有益なお話を伺つた。堅苦しい講演よりも愉しさの中に民衆を訓練することの出來る樂曲や浪曲や漫才についてのお話は、今更ながら、身にしみて感じることの出來た生甲斐だつた。アンドレ、モーロアはチヤーチルから、小說を書くのはやめ給へ傳記を書くのもいけない、力を伴はない文化は明日にでも死滅させる文化となつてしまふのだと言はれてゐる。

懇談會が終つて、御堂筋を歩きながら、自分はしみ〴〵と、シナリオの仕事は男子一生の仕事であると思つた。そして、ぎり〳〵の日に間に合はせるために徹夜をして書いた戰陣訓三場の仕事を、今更ながら恥しいものに思つた。

吉田精一氏編輯「展望・現代日本文學」

古谷綱武

「目下の現代文學は、その量的氾濫と質的貧困とのために、一層その現實の姿を正しく認識し難くい。それにもかかはらず、いや、さうであるだけに、混沌たる現象の內に本質的な文學のあり方をもとめ、正しき明日への萌芽を見出さうと努めることは、およそ文學に關心するものの願ひであらう。そのためにこそ批判と展望とは常に要求される。しかるに、本質的な意味での批判が、今日ほど缺亡してゐることはなかつたのである」

▼……

以上は編輯者吉田精一氏の序文の一節であつて、この言葉から、この書物の性質を察することができるであらう。

全體は三部に分れてゐて、第一部は「現代文學鳥瞰」として、小說を吉田精一、片岡良一、詩を神保光太郎、短歌を渡邊順三、俳句を中村草田男が書いてゐる。第二部は作家論。川端を中村光夫、岸田を岩崎萬壽夫、武田を瀧川晃、井伏を酒井森之介、阿部を伊藤整、舟橋を西村孝次、中野を杉森久英、林(芙)を矢崎彈、島木を小田切秀雄、丹羽を山岸外史、石川を高田瑞穗、石坂を伊澤元美、火野を田中保隆が論じてゐる。

第三部では、現代文學の諸問題を、青野季吉、淺野晃、岩上順一、池島重信、瀬川健次郎らがとりあげてゐる。

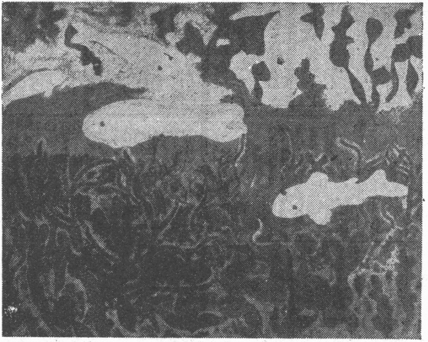
▼……

私は最近、日本では、一般文化史に比べて、小さなひとつのテーマをとりあげたやうな特殊文化史の研究文獻といふものが、きはめてすくないことを痛感してゐるが、かうして現代文學史を、やゝ學的にまとめた業績に接すると、かういふ一種、ジャーナリズムの上では下積みな整理といふ仕事も、實に等閑に附されてゐたといふことも改めて感じさせられるのであるそしてこの執筆陣でもわかるやうに、明治大正文學の若い研究史家たちが、かういふ現代史の研究にまで手を伸ばしてくれたことは、現代日本文學の客觀的な姿を把握する上に、きはめて意義の深いことゝ思ふ。

しかし多數の執筆家によつて編まれた、この現代文學史は、かならずしも編者が考へてゐただけの十分な內容の充實を期することはできなかつたやうであるが、自分がこのやうな書物をつくるときの困難を考へてみると、編者の努力を多としなければならない。私はこれをひとつの試みとして、かういふ仕事が、もつとひつくりかへされ、もつとさかんになることを願つてやまない。

▼……

全體を通じて、滿洲事變までの現代小說史を書いてゐる吉田精一氏の眼が、把握の鋭い正確さにおいて光つてゐる。史家としての將來を期待させる新人である。島木健作を論じてゐる小田切秀雄氏も落ちついた深さをもつてゐる（修文館・二圓五十錢）



◀――藻と魚　織田彩子――▶

老人と青年

住田正一

最近博士になつた友人の感想に「博士論文の內容は發表されるが、その研究に到着する迄の、幾多の失敗の經驗は誰も發表しない。然し考へて見ると、寧ろその發表こそ、後進學徒に參考になるものではあるまいか。同じ失敗を繰返す必要が無くて濟むわけである」

その通りである。失敗の經驗こそ、後進者の知るを要する事柄である。學問の進步に益するものであり、能率を高めるものである。

事業においても、失敗の統計なり、材料は無いものであらうか、更に進んで「失敗辭書」といふ如きものは出來ないものであらうか。さうなると吾々は大變に助かる。先づ事業を始める時に、その辭書を繙つて見る「失敗辭書」に有るか無いかを調べて、それから事業に着手する。さうなれば事業になる。失敗能率は大に增加する。失敗辭書編纂して與れる特志家は無いものであらうか。

—○—

だが然し、博士論文にだつてさへ失敗の統計も材料も蒐集されて居らない位である。況んや事業に於いてをやである。先づ空想に近い事である。

けれ共、能く考へて見ると、なる程、活字に表はれた辭書は無いが、生きた辭引は在る。老人や先輩は澤山現存して居る。其人々の知識と經驗、失敗の材料は容易に得られるわけである。

彼の道、此の道、其歩んだ道と末路の道、明確に教へを受ける事が出來るのであつて、敢て辭書無きを悲む要は無い。又此意味に於て、老人は大切なもの、有難いものである。

—○—

明治維新の歷史を見ると、其當時活躍した人、推進力となつた人々は、何れも二十代、三十代の若い青年である。世人は此事實を見て、革新は青年でなければならないといふ。なる程、革新の實行者は若い人々でなければ先づ駄目である。青年の持つ勇氣と斷行力とが必要である。青年の力に俟たなければならない。

然し明治維新の大業に就ても、青年と老人の關係を今少し深く考察して見る要はないか。平たく云へば、ベンチ・コーチがしつかりして居つたから、あの大業が成功したのである。青年の實行力は表面に出た姿である。內面には老人の隱れた力が動いて居つたのではあるまいか。

—○—

吉田松陰の傳記を見ると、彼は諸國を歩いて常に地方の先輩、古老の教へを受け、それに依つて自ら修養して居る。

明治維新は、攘夷から開港に、開港から文明開化に、時代は急角度に移り變つた。武市半平太、吉田東洋、江川太郎左衛門、佐久間象山、等々數々の名ベンチ・コーチが擧げられるであらう。更に各地方の澤山の有名無明の指導者先輩が數へられるであらう。

詳細に維新史を考察すると、若い人々は實行者の立場から、天下に名を成したけれども、其裏面に活動したベンチコーチの老人は、芝居の「富岡先生」のそれの如く田舍に埋もれた形になつた人々が多かつたのではあるまいか。

必ずしも表面に、名を成さなかつたかも知れないが、維新の大業を建設した指導者であつた事に於ては、同じ一つの大きな力の基礎を形成したものではあるまいか。

あれだけの大事業、單なる青年の元氣のみの力では出來ない。ベンチの指導無くしては成功し難い事である。維新の青年が老人の知識と經驗とを上手に活用したのである。又それが當然の事である。生きた辭書をうまく使つたのである。

—○—

現狀維持か革新かの叫びは常に聞く聲である。然し今の世相、老人と青年との考へ方が懸け離れて居る時代は又とあるまい。若い人々の會合に出ると、老人は舊体制であると罵倒する。老人の會合に出ると若い者は危險思想であると非難する。何處が舊体制であるのか、何の點が危險思想であるのか、明確にしない。

老人は言ふ。若い者は理屈は達者である。然し仕事をやらして見ると、碌な事は出來ない。手紙一本滿足には書けないではないか。事業と云ふものは、若い者の考へる樣な簡單なものではない。我々數十年の努力は並大抵のものではない。彼等に任せて置いたら、生産擴充どころか、それこそ生産減退である。

若い者は言ふ。老人は言ふ事だけは立派である。然し果して彼等は公益優先と云ふ意味を理解して居るのか、自律とか自主的とか云ふが、最近三ケ年會社の配當が自主的に何れだけ引下げられたか、事業會社の公債保有が幾何增加して居るか。

御互ひの非難攻擊は數限りなく聞くが、未だ兩者が各々持つて居る力を、如何に活用せんか如何に協力せんか、と云ふ努力なり、考へ方なりを聞いた事は無い。

考へて見るのに、現在、生産擴充に行詰りを生じて居るのは統制經濟の罪でも無く、革新論の誤りでもない。勿論官吏が惡いのでも無い、假に自由主義の昔に戻して見ても、生産擴充は希望通りに行ひ得ない事は明らかである。

何んとなれば原因は他にあるのであつて、資材原料が不足して居るからである。資材原料の不足は國際情勢の變化と支那事變の進行とに原因して居るのである。故に此事情に卽した根本對策を考案しなければ、問題の解決は得られないのである。

惟ふに、現在の日本は物が足らないのである。物が足らなければ生産を考へるより外、途がない。然しそれには、從來の觀念と根本的に異つた徹底的な生産理念が必要である。生産が國家として何をさて措いても必要なものなら、それに應ずる國民的生産組織が緊要である。

先づ根本的に、國民全體老若男女を問はず何人にも生産が國民最高の義務である事の思想を植附けなければならない。徴兵の義務、教育の義務、納税の義務等と相並んで生産義務の觀念を抱かさなければならない。國民教科書の第一頁には勿論、人間の一生は生産の爲めであり、死ぬる時に、プラスであつて初めて、その人の一生は國民的義務を果したといふ事にならなければならない。生産の觀念は單り道德的のみならず、法律的にも一貫した流れが必要である。更に、政治、經濟、社會組織全般の上にも、生産理念が基調とならなければならない。國民活動組織がこの基調に順應する事を要する。

最には大体次の事が考へられる卽ち今の政治、經濟、否廣く國民生活の一切を「生産」「配給」「評價」「消費」の四部門に分ち、その中に總てを入れてしまふ。四部門の統括、運用は總て、國民的生産の方向に進展させる。卽ち生産第一義の組織であり、目標である。生産を國民的使命とする意義を徹底さす組織である。

同じ意味において、東亞共榮圈內の各民族、各國家に對して、生産第一義の組織形態を樹立せしめる。生産理念を以て、共榮圈內の國家的、民族的結合を圖る。又從つて生産を中心とした相互の共榮を計る。勿論、その民族的生産には、各特徴があるので、其特異的生産の指導、發展を考へ、有機的に圈內に於ける大生産組織を考案しなければならない。一貫した指導精神が必要である。何れにしても、生産理念が東亞經濟ブロックの根本であり、又政治的にも同樣である。斯くの如き意味に於て始めて、東亞共榮圈の意味があるものと信ずる。

生産が國民最高の義務であるとすると、老人も青年もない。男も女もない。況んや老人と若い者との對立など在り得ざる事である。唯一筋に生産目標を中心に協力あるのみである。

唯、生産に於て、男女性能に基く自然的特異が存する如く、老人と青年に於ても、本能的特異が在る。又それは自然的なものである。青年の持つ特徴は熱であり、氣槪であり、實行力である。然しながら、其實行力は主觀的判斷に陷つてはいけない。客觀的價値を具備する事を要する。獨善は愼まなければならない。それが爲には、矢張りベンチ・コーチが必要である。老人の持つ特徴と經驗である。

生産國家の建設は、仲々容易な仕事ではない。國民總力戰である然も短年月では完成し難い大きな問題である。

此國民的難事業の中堅たる者は卽ち青年であるが、其青年が、今の日本に於けるが如く、老人と離れた理解を持つて居る事は遺憾な事である。

古諺に、山には大樹が無ければならない。國には老臣が必要である。野球も中學チームならいざ知らず、明治神宮球場になると、名監督が必要である。ベンチの意向を充分に伺ひながら試合は進行さす可きである。

落花へ高く

中村草田男

岩の梅　山の若者　髪を分ける
生徒ごち　久濶を叙す　茨の花
春落日　小枝まで　枯れ猛れる松
春の晝　鼻側に手當で　師の說かる
軍鷄は日へ落花へ高く頭をさらす

「和具の海女」

海底から浮び上つた海女の吐く息吹きの音、みてゐる私はつよい潮の香を胸一杯に感ずるとゝもに逞しい生活力とその生き方に搏たれないわけにはいかなかつた、一日中働きつゞけてしかも一年の大半を海底にもぐつて生きていかなければならない彼女達の生活をキャメラは克明にゑがいていく、人或るひは美しき詩情を感んずると言ふかも知れぬ、けれどもわれ〳〵はもつと別のものを考へなくてはならないのでなからうか、美といふことがいはれるならば生活と身をもつて四つに組んだものゝ持つ迫力が、眞摯な生一本のものとして〳〵われに感じられるからであり、それゆゑにしらず〳〵頭を下げて働く彼女達に心からの感謝の氣持を生じてくるのである、今まで頭にもつてゐた海女といふものと別の海女が、少しでも明確に心にゑがかれたならば、それはこの映畫の成功であり、文化映畫のかゝる世界への進出も又大いに望ましいことなのである（T生）

――寫眞は「和具の海女」の一シーン

支那書籍專門
京都市中京區寺町通丸太町南入
彙文堂書莊
電話上(3)七六七番

眼鏡
府立醫科大學眼科
帝國大學醫院眼科
赤十字社京都支部醫院眼科
御指定
眼鏡專門
正確廉價
獨逸カール・ツアイス特約店
吉川眼鏡店
本店・京都帝國大學醫院眼科前　電話上四一九一番　振替大阪八三七二八番
支店・京都府立病院正門前　電話上二三〇番

ダニエル・ダリユウ週間
出町東寶映畫劇場
五日ヨリ
ダニエル・ダリユウ主演
暁に歸る
"RETOUR A L'AUBE"
華やかなシーズンにおくるダリユウ映畫の最高作品！
歌ふダニエル・ダリユウ
唄ふダリユウ・踊るダリユウ・たのしいダリユウ・アルバム

白井直眼鏡店
京都府立醫大病院眼科部
京都帝大病院眼科部
日本赤十字社病院眼科部
京都陸軍病院眼科部
御指定所
九寶發レンズ　光國印　特許
京都帝大病院正門前　電話上(3)2279　振替京都3070

公法雜誌
佐々木惣一博士編輯
（第七卷第五號）五月號・要目
▽社會の立場よりみたる公權力と濫用（一）……中島重
▽法と倫理（二）……恒藤恭
▽簡易生命保險法及郵便年金法の外地施行について（一）……青谷和夫
▽ボールンハック「ワイマール憲法と指導者國家」（一）・（完）……吉富重夫
▽官吏制度の改革（二）……中谷敬壽
▽帝國憲法の由來（第五講）……佐々木惣一
▽閉會中の帝國議會……佐々木惣一
▽（判例解説）行政裁判所判例（磯崎・中谷・拔萃）大審院判例（瀧川・大石）▼學界消息
◇定價一部五十錢（送料二錢）◇一年又は半年分を公法研究所（振替大阪三二五二九）に前納の事
東京市小石川區大和町三十番地　良書普及會　振替口座東京六四四九番

文化戰士へ捧げる
鮮色の花束アテナ！
丸善アテナインキ
2オンス入　30セン
●高級で低廉なアテナ萬年筆●
MARUZEN

新藥・調劑・醫科用品
東山藥局
熊野神社停留所前
電話上3140番

軸・襖・壁張　其他御報參上
表具師
渡邊昇雲堂
京都市吉田中河原町一〇
電上五六六三・振京八〇七七

文房具・事務用品
長谷日進堂
東山線熊野電停北
電話上二二九五番

眼科　石田醫院
河原町今出川南側電停前
電話上(3)7776番
診療時間（毎日午前及夜間　日曜祭日午前中）

死藏洋服の改造！
獨特の技術を加へ新品同樣立派に再發足が出來ます。
ドライクリーニング・修理・プレス
ホスピタル
百萬遍電停北入
電上(3)六〇八三番

醫學博士　伊佐早修治
皮膚科・性病科
佛光寺通寺町東入ル
電話下(5)五三七番

小山齒科醫院
東京齒科醫學士　小山正光
市電百萬遍電停西（電車通北側）
電話上五八二五番

上映中七日迄　踊るニユウ・ヨーク
★探偵映畫傑作集週間★
8・9　情熱なき犯罪
10・11・12　影なき男
13・14　奥さんは噓つき
十五日ゟ　クーパー名作週間　オペラ・ハット
十八日ゟ　眞珠の頸飾
★デユヴイヴイエ傑作競映週間
22日より　我等の仲間
25日より　ミモザ館
河原町三條
階上映畫館
電話本局二三五二番
入場料廿二錢（税共）

明治廿九年より現代に至る
日本映画史
映画四十年の回顧
思ひ出懷しき映画の數々がこの一篇に甦り又諸君の思ひ出もこの映画を通じて甦る！
協贊　松竹株式會社　東寶映畫株式會社　日本活動寫眞株式會社　新興キネマ株式會社　大都映畫株式會社
大日本映畫協會製作　松竹文化映畫課提供
八日
日本最初のニユース！日露戰爭
ジゴマ
尾上松之助　忍術映画
アントニオとクレオパトラ
愛染かつら
上海陸戰隊
映画法通過
全五卷
解說　特別說明　松井翠聲　徳川夢聲　玉井旭洋　泉天嶺　生駒雷遊
新京極六角
京洛映画劇場